

注目種			
<b>ツユクサ白斑病菌</b>		神奈川県	2006 1995
<i>Kordyana commelinae</i> Petch		環境省	2020
			準絶滅危惧
			—

  

<p>【判定理由】 本種の発生環境が特定できておらず、今後さらに調査が必要と考えられるため。</p> <p>【生育環境・生態】 植物寄生性。宿主はツユクサ。</p> <p>【現状】 宿主は普通種だが、本菌の発生は限定される傾向がある。生態的知見が少なく、今後の追加調査が必要である。</p>	<p>【国内分布】 本州</p> <p>【県内分布】 小田原市、相模原市、鎌倉市</p> <p>【存続を脅かす要因】 土地造成</p> <p>【特記事項】 場所により多産することもあるが確認例は少ない。本種の属すモチビョウキン目に関する県内での調査は不十分であり、宿主が減少傾向にある種については、今後調査が必要である。</p>
---	--

フクシニア科

準絶滅危惧			
<b>ワダンさび病菌</b>		神奈川県	2006 1995
<i>Uredo crepidis-integrae</i> Lindr.		環境省	2020
			準絶滅危惧
			—

  

<p>【判定理由】 宿主および本種の生育環境が今後、減少する可能性があるため。</p> <p>【生育環境・生態】 植物寄生性。宿主はワダンなど、アゼトウナ属。</p> <p>【現状】 自然植生の残る海岸沿いに生息する。</p>	<p>【国内分布】 西日本、小笠原諸島</p> <p>【県内分布】 三浦市</p> <p>【存続を脅かす要因】 土地造成、海岸開発</p> <p>【特記事項】 本種の属すサビキン目には農業上有害となる植物病原菌も知られ、駆除の対象となることはあるが、野生植物に発生する種のうち、宿主が減少傾向にある種については、今後調査が必要である。</p>
---	---

ミクロゲネリア科

準絶滅危惧			
<b>ヒノキ・アスナロ・クロベ天狗巣病菌</b>		神奈川県	2006 1995
<i>Blastospora betulae</i> S. Kaneko & Hirats.f.		環境省	2020
			準絶滅危惧
			—

  

<p>【判定理由】 県内にタイプロカリティがあり、発生地が限定されているため。</p> <p>【生育環境・生態】 植物寄生性。宿主は、アスナロ、クロベなど。</p> <p>【現状】 場所により多産。</p>	<p>【国内分布】 北海道、本州、四国</p> <p>【県内分布】 箱根町</p> <p>【存続を脅かす要因】 森林伐採</p> <p>【特記事項】 箱根町の生息地は本種のタイプロカリティである。本種の属すサビキン目には農業上有害となる植物病原菌も知られ、駆除の対象となることはあるが、野生植物に発生する種のうち、宿主が減少傾向にある種については、今後調査が必要である。</p>
---	---

準絶滅危惧

ヤブニッケイ黒穂病菌

*Clinococonidium onumae* (Shirai ex S. Ito) Kakis., Nagano & Denchev

神奈川県	2006	準絶滅危惧
	1995	
環境省	2020	—

【判定理由】

本県は分布北限域に近いと考えられるため。

【生育環境・生態】

植物寄生性。宿主はヤブニッケイ。

【現状】

海岸付近の社寺林などの自然植生下で発生するが、多くはない。

【国内分布】

千葉県、西日本各地、南西諸島

【県内分布】

小田原市、藤沢市、鎌倉市

【存続を脅かす要因】

森林伐採

【特記事項】

本種の属すクロボキン目には農業上有害となる植物病原菌も知られ、駆除の対象となることはあるが、野生植物に発生する種のうち、宿主が減少傾向にある種については、今後調査が必要である。

菌類

ガマノホタケ科

注目種

ムキタケ

*Sarcomyxa edulis* (Y.C. Dai, Niemelä & G.F. Qin) T. Saito, Tonouchi & T. Harada

神奈川県	2006	—
	1995	
環境省	2020	—

【判定理由】

近年、分類学的整理がなされ、類縁種が分割されたので、再調査が必要であるため。

【生育環境・生態】

腐生性。ブナ、ミズナラなどの倒木に発生する。

【現状】

ブナ帯の広葉樹林に生息する。

【国内分布】

本州、北海道

【県内分布】

山北町、清川村

【存続を脅かす要因】

森林伐採

【特記事項】

斎藤ら(2014)により、従来のムキタケの再検討がなされ、子実体が黄色型の菌群に対し、本和名、学名が当てられた。再調査が必要である。

ガマノホタケ科

注目種

オソムキタケ

*Sarcomyxa serotina* (Pers.) P. Karst.

神奈川県	2006	—
	1995	
環境省	2020	—

【判定理由】

近年、分類学的整理がなされ、類縁種が分割されたので、再調査が必要であるため。

【生育環境・生態】

腐生性。ブナ、ミズナラなどの倒木に発生する。

【現状】

ブナ帯の広葉樹林に生息する。

【国内分布】

本州、北海道

【県内分布】

山北町

【存続を脅かす要因】

森林伐採

【特記事項】

斎藤ら(2014)により、子実体が緑色型で、幾分発生時期が遅い菌群に対して、本和名、学名が当てられ、ムキタケと識別された。2018年の山北町世附におけるRDB菌類調査により検出された。

準絶滅危惧									
<div style="background-color: #333; color: white; padding: 5px; text-align: center; font-weight: bold;">カンゾウタケ</div> <p><i>Fistulina hepatica</i> (Schaeff.) With.</p>	<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td rowspan="2" style="text-align: center;">神奈川県</td> <td style="text-align: center;">2006</td> <td style="text-align: center;">—</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">1995</td> <td style="text-align: center;">—</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">環境省</td> <td style="text-align: center;">2020</td> <td style="text-align: center;">—</td> </tr> </table>	神奈川県	2006	—	1995	—	環境省	2020	—
神奈川県	2006		—						
	1995	—							
環境省	2020	—							
<p>【判定理由】 発生基質となるスダジイなどの老齢木が減少傾向にあるため。</p> <p>【生育環境・生態】 腐生性。スダジイなどの老齢の生木上の枯死部に発生する。</p> <p>【現状】 老齢木の残る社寺林などに発生するが多くはない。</p>	<p>【国内分布】 本州、九州、沖縄県</p> <p>【県内分布】 小田原市、真鶴町、箱根町、平塚市、横浜市、など</p> <p>【存続を脅かす要因】 森林伐採</p>								

シメジ科

絶滅危惧 I 類									
<div style="background-color: #333; color: white; padding: 5px; text-align: center; font-weight: bold;">ホンシメジ</div> <p><i>Lyophyllum shimeji</i> (Kawam.) Hongo</p>	<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td rowspan="2" style="text-align: center;">神奈川県</td> <td style="text-align: center;">2006</td> <td style="text-align: center;">絶滅危惧 II 類</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">1995</td> <td style="text-align: center;">—</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">環境省</td> <td style="text-align: center;">2020</td> <td style="text-align: center;">—</td> </tr> </table>	神奈川県	2006	絶滅危惧 II 類	1995	—	環境省	2020	—
神奈川県	2006		絶滅危惧 II 類						
	1995	—							
環境省	2020	—							
<p>【判定理由】 近年、県下からの確実な発生例が確認されたものの、標本記録が依然として極めて少ないため。</p> <p>【生育環境・生態】 秋、落葉性ブナ科樹木の優占する広葉樹林の林床に子実体を形成する。外生菌根菌。</p> <p>【現状】 県内での発生記録は極めて少ないが、近年、新たな産地が確認された。また、近年県下でも拡大しているナラ枯れの影響により、発生環境が急速に脅かされる可能性がある。</p>	<p>【国内分布】 国内各地</p> <p>【県内分布】 山北町、南足柄市</p> <p>【存続を脅かす要因】 森林伐採、山地極限、食用採取、ナラ枯れ</p> <p>【特記事項】 マツタケと並び、日本で古くから優秀な食用菌として親しまれてきた種である。そのため、食用目的の採取圧が高いと考えられ、標本を基にした発生状況の把握が困難な菌である。</p>								

イトポンシメジ科

準絶滅危惧									
<div style="background-color: #333; color: white; padding: 5px; text-align: center; font-weight: bold;">ハルノウラベニタケ</div> <p><i>Clitopilus vernalis</i> Har. Takah. &amp; Degawa</p>	<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td rowspan="2" style="text-align: center;">神奈川県</td> <td style="text-align: center;">2006</td> <td style="text-align: center;">—</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">1995</td> <td style="text-align: center;">—</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">環境省</td> <td style="text-align: center;">2020</td> <td style="text-align: center;">—</td> </tr> </table>	神奈川県	2006	—	1995	—	環境省	2020	—
神奈川県	2006		—						
	1995	—							
環境省	2020	—							
<p>【判定理由】 分布が局所的であり、発生環境の維持も困難なため。</p> <p>【生育環境・生態】 春から初夏にかけて、腐朽の進んだアカマツ等の枯死木から発生する。腐生性。</p> <p>【現状】 全国的に発生はやや稀かつ局所的であるが、県内における産地では比較的安定して発生が確認されている。</p>	<p>【国内分布】 本州</p> <p>【県内分布】 小田原市</p> <p>【存続を脅かす要因】 森林伐採、管理放棄、自然遷移、マツ枯れ</p> <p>【特記事項】 2011年に小田原市産の標本をホロタイプとして新種記載された菌である。広葉樹林内に残存するアカマツ枯死木から発生が確認されているが、森林内のアカマツ生木の減少により、本種の生育環境にも影響が及ぶことが懸念される。</p> <p>【文献等】 Takahashi, H, Y. Degawa, 2011. Two new species of Agaricales and a new Japanese record for <i>Boletellus betula</i> from Japan. <i>Mycoscience</i>, <b>52</b> (5): 312–318.</p>								

絶滅危惧Ⅱ類

キヒダサカズキタケ

*Hydropus aurarius* Har. Takah.

神奈川県	2006	準絶滅危惧
	1995	
環境省	2020	—

【判定理由】

確認例が少なく、発生地も限定されているため。

【生育環境・生態】

夏、広葉樹の材上に子実体を形成する。腐生性。

【現状】

確認例は少ないものの、県内の複数地点から記録がある。そのため、本種の存続には発生環境の今後の維持管理が重要である。

【国内分布】

本州、九州

【県内分布】

小田原市、箱根町

【存続を脅かす要因】

森林伐採、登山道整備

【特記事項】

2002年に小田原市産の標本を正基準標本として新種記載された菌である。低山から山地の広葉樹林まで生息域は広いものの、発生は散発的で、生態的特性についても十分には明らかになっていない。

【文献等】

Takahashi, H. 2002. Two new species and one new combination of Agaricales from Japan. *Mycoscience*, **43**: 397–403.

準絶滅危惧

アミガサホウライタケ

*Marasmius brunneospermus* Har. Takah.

神奈川県	2006	—
	1995	
環境省	2020	—

【判定理由】

複数の産地が知られているが、発生がやや稀であるため。

【生育環境・生態】

初夏から秋にかけて、広葉樹落葉上に発生する。落葉分解菌。

【現状】

県内の数地点から散発的に発生が記録されているが、新種発表から20年以上が経過した現在でも、確実な記録は少ない。

【国内分布】

本州

【県内分布】

大和市、平塚市、小田原市、藤沢市

【存続を脅かす要因】

森林伐採、道路建設

【特記事項】

本種は1999年に大和市産の標本に基づき新種記載された、比較的大型の子実体を形成するホウライタケ属菌である。和名は傘表面に多数の細かな陥没がある点に由来する。胞子紋が白色及び褐色の二色が混合する点も特徴的である。

【文献等】

Takahashi, H. 1999. *Marasmius brunneospermus*, a new species of *Marasmius* section *Globulares* from central Honshu, Japan. *Mycoscience*, **40**: 477–481.

情報不足

キクモンクヌギタケ

*Mycena chrysanthemiformis* Har. Takah.

神奈川県	2006	—
	1995	
環境省	2020	—

【判定理由】

確認例が少なく、発生地も限定されているため。

【生育環境・生態】

早春から初夏にかけて、広葉樹の生木もしくは腐朽木上に発生する。

【現状】

県内の数地点から散発的に発生が記録されているが、新種発表から20年以上が経過した現在でも、確実な記録は少ない。

【国内分布】

本州

【県内分布】

川崎市、大和市、小田原市

【存続を脅かす要因】

森林伐採、道路建設

【特記事項】

本種は2000年に神奈川県および東京都産の標本を基に新種記載された。傘の直径10 mm以下の微小な菌で、発見がやや困難なこと、および一般的な図鑑に掲載されていないことから、認知度は依然として低い。各地で発生が確認された場合は、確実に標本記録を残すことが必要であろう。

【文献等】

Takahashi, H. 2000. Two new species of *Mycena* from eastern Honshu, Japan. *Mycoscience*, **41**: 545–549.

準絶滅危惧		2006		絶滅危惧Ⅱ類
ミタケウスキブナノミタケ	神奈川県	2006	—	
		1995		
<i>Mycena cf. luteopallens</i> Peck	環境省	2020	—	

【判定理由】  
ブナ林に特有の菌であり、県内の温帯性ブナ林が減少傾向にあるため。

【生育環境・生態】  
ブナおよびイヌブナの古い埋土種子から発生する。

【現状】  
現状では県内における発生環境は比較的改善してきていると考えられる。

【国内分布】  
本州

【県内分布】  
山北町、愛甲郡清川村

【存続を脅かす要因】  
森林衰退、シカ影響、温暖化

【特記事項】  
本菌と酷似するウスキブナノミタケ *M. luteopallens* はひだの側シスチジアの形態が異なるとされるが、両種の異同や学名について、再検討が必要である。ブナ林の安定的な維持が両種の保全に不可欠である。

【文献等】  
城川四郎・三村浩康・井上幸子・藤澤示弘. 2007. 菌類: 大型菌類. 丹沢大山総合調査団編, 丹沢大山総合調査学術報告書, 丹沢大山動植物目録 pp. 428–460. 平岡環境科学研究所, 相模原.

情報不足		2006		—
イズミノアシナガタケ	神奈川県	2006	—	
		1995		
<i>Mycena fonticola</i> Har. Takah.	環境省	2020	—	

【判定理由】  
まだホロタイプ産地から数例の採集例があるのみで、生態や各地での分布に関する情報が不足しているため。

【生育環境・生態】  
晩秋、シラカシ・コナラが優占する広葉樹林の落葉落枝上に発生する。木材腐朽・落葉分解菌。

【現状】  
1999～2000年にタイプ産地で採集されて以降、本種の確実な記録はない。

【国内分布】  
本州(神奈川県)

【県内分布】  
大和市

【存続を脅かす要因】  
森林伐採、産地局限、ナラ枯れ

【特記事項】  
小型(10–25 mm)の傘に著しく細長い柄を有するきのこで、アシナガタケ *Mycena polygramma* (Bull.) Grayなどの類似種が多いが、灰紫色の傘と柄が特徴的である。原記載の他には本種に関する確かな情報が無く、県内外においてその存在が見過ごされている可能性がある。

【文献等】  
Takahashi, H. 2007. Eight new species of the genus *Mycena* from central Honshu, Japan. *Mycoscience*, 48: 342–357.

準絶滅危惧		2006		—
トサカオチエダタケ	神奈川県	2006	—	
		1995		
<i>Mycena spinosissima</i> (Singer) Desjardin	環境省	2020	—	

【判定理由】  
産地に限られ、各地における発生も散発的であるため。

【生育環境・生態】  
初夏から秋にかけて、林内の落枝上、もしくは倒木上に発生する。

【現状】  
県内の複数地点で発生例はあるものの、発生は多くない。

【国内分布】  
本州

【県内分布】  
横浜市、小田原市、真鶴町、葉山町

【存続を脅かす要因】  
森林伐採、道路建設、市街化

【特記事項】  
傘の直径1 mm未満の小型のきのこであるが、幼菌のうちから傘が類白色～淡黄色の円錐状突起(チェロサイト; cheroocytes)に被われ、特徴的な外観を呈す。同定が容易なため、各地での発生状況モニタリングにも有用であると考えられる。

情報不足

マツタケ

*Tricholoma matsutake* (S. Ito & S. Imai) Singer

神奈川県	2006	絶滅
	1995	
環境省	2020	準絶滅危惧

【判定理由】

著しく採集圧の高い種であり、たとえ発生があっても、標本情報に基づく発生状況の把握が困難だと考えられるため、「絶滅」から「情報不足」へランク変更を行った。

【生育環境・生態】

秋、アカマツその他、マツ科針葉樹林の貧栄養土壌に発生する。外生菌根菌。

【現状】

過去に大磯町、厚木市などにおいて発生していたという伝聞はあるものの、県内の確実な標本記録はない。

【国内分布】

国内各地

【県内分布】

不明

【存続を脅かす要因】

森林伐採、森林衰退、自然遷移、食用採取、マツ枯れ

【特記事項】

県内での確実な発生情報は無いものの、発生の可能性がある環境が消失したわけではなく、万が一発生していたとしてもその情報を得ることは極めて難しい。そのため、2006年時のRDBでの「絶滅」から「情報不足」にランクの変更を行った。

絶滅危惧Ⅰ類

バカマツタケ

*Tricholoma bakamatsutake* Hongo

神奈川県	2006	絶滅危惧Ⅱ類
	1995	
環境省	2020	準絶滅危惧

【判定理由】

産地に限られ、かつ近年の発生記録がごく少ないため。

【生育環境・生態】

初秋から秋にかけて、ブナ科樹木の樹下に発生する外生菌根菌。

【現状】

近年では山北町において発生記録があるが、発生は非常に稀と考えられる。

【国内分布】

日本全土

【県内分布】

相模原市、山北町

【存続を脅かす要因】

森林伐採、森林衰退、食用採取、ナラ枯れ

【特記事項】

本種はナラ類やシイ、カシ類などブナ科樹木と共生する点でマツタケと異なるものの、形態も香りもマツタケと酷似し食用的価値が高いことから、証拠標本が残される機会が少なくと推察される。更に、県内各地での菌類調査の実績から、発生頻度も決して高くないと考えられ、発生環境の積極的な保全が望まれる種である。

絶滅危惧Ⅱ類

スナジホウライタケ

*Marasmiellus mesosporus* Sing.

神奈川県	2006	絶滅危惧ⅠA類
	1995	
環境省	2020	—

【判定理由】

本種の発生適地である、自然植生の残る海岸が減少しているため。

【生育環境・生態】

夏から秋、海浜のイネ科やカヤツリグサ科等の草本(チガヤやコウボウムギ等)の根際に子実体を形成する。腐生性もしくは寄生性。

【現状】

海岸開発や近年の大型台風被害などにより、発生環境は減少の傾向にある。

【国内分布】

日本全土

【県内分布】

横浜市、大磯町

【存続を脅かす要因】

海岸開発、海岸浸食

【特記事項】

本種の発生に適した、イネ科草本の優先する海浜植生は、海岸開発や高波などによる影響を受けやすい脆弱な環境であり、県内ではすでに断続的に残されているのみである。

『神RDB06』では別名のカヤネダケとして記載。

絶滅危惧Ⅰ類			
<b>トゲミフチドリツエタケ</b>		神奈川県	2006 1995
<i>Dactylosporina brunneomarginata</i> Ushijima, Nagas. & S. Kigawa		環境省	2020

**【判定理由】**  
発生環境がブナ帯に限られ、発生も稀な種であるため。

**【生育環境・生態】**  
冷温帯ブナ・ミズナラ林に発生する。ひだに黒色の縁取りがあり、担子胞子が先鋭でない刺状突起に被われる点が大きな特徴である。腐生菌。

**【現状】**  
丹沢山地において発生が確認されているが、非常に稀である。

**【国内分布】**  
本州

**【県内分布】**  
相模原市、山北町

**【存続を脅かす要因】**  
森林衰退、シカ影響、温暖化

**【特記事項】**  
発生例が少なく、子実体数も少ないことが多く稀な種。2015年に県内産標本に基づき新種記載されたが、中国から報告されている *Cibaomyces glutinis* Zhu L. Yang, Y.J. Hao & J. Qin との異同について検討の余地がある。

ハラタケ科

絶滅危惧Ⅱ類			
<b>アカヒダカラカサタケ</b>		神奈川県	2006 1995
<i>Melanophyllum haematospermum</i> (Bull.) Kreisel		環境省	2020

**【判定理由】**  
顕著な形態的特徴を有するにも拘らず、標本記録が僅少で、発生が稀と考えられるため。

**【生育環境・生態】**  
林内地上に散生する。

**【現状】**  
発生地では目立った発生の減少は確認されないが、元来稀な種であるため、発生環境の適切な維持管理が必要である。

**【国内分布】**  
本州

**【県内分布】**  
小田原市、平塚市、横浜市、愛川町、山北町

**【存続を脅かす要因】**  
森林伐採、道路建設、市街化

**【特記事項】**  
地味な灰褐色の傘とは対照的に、鮮やかな赤色のひだを有する特徴的なきのこである。それゆえ、同定は容易であるが、発生の記録は多くない。

カブラマツタケ科

絶滅危惧Ⅱ類			
<b>カブラマツタケ</b>		神奈川県	2006 1995
<i>Squamanita umbonata</i> (Sumst.) Bas		環境省	2020

**【判定理由】**  
産地に限られ、かつ子実体の発生がごく散発的であるため。

**【生育環境・生態】**  
夏から秋にかけて、広葉樹林地上に発生する。菌寄生性で、テングタケ属の子実体に寄生していると考えられている。

**【現状】**  
県内のいずれの産地においても、発生は極めて偶発的である。また、近年進行しているナラ枯れの影響も懸念される。

**【国内分布】**  
日本全土

**【県内分布】**  
横浜市、小田原市

**【存続を脅かす要因】**  
森林伐採、森林衰退、産地局限、ナラ枯れ

**【特記事項】**  
カブラマツタケ属の菌はハラタケ目の他属の菌に寄生し、宿主の子実体に乗っ取るように自らの子実体に変貌させてしまふ、極めて特異な生態をもつ。このような菌寄生菌の保全には、宿主菌類の生育環境を安定的に維持することが不可欠である。

菌類

## 準絶滅危惧

## タマノウタケ

*Calvatia cf. fragilis* (Vittad.) Morgan

神奈川県	2006	準絶滅危惧
	1995	
環境省	2020	—

## 【判定理由】

本種の生育に適した温帯性落葉樹林が減少傾向にあると考えられるため。

## 【生育環境・生態】

山地の落葉樹林内の倒木上などに発生する腐生菌。

## 【現状】

発生に適した環境は県内では限定的である。

## 【国内分布】

本州

## 【県内分布】

清川村、小田原市

## 【存続を脅かす要因】

森林伐採、森林衰退

## 【特記事項】

自然度の高い冷温帯～暖温帯広葉樹林において見られる菌で、丹沢山地で複数例の発生記録があるが、近年小田原市内の低山でも発生が確認された。

## 絶滅危惧 I 類

## ドングリタケ属

*Disciseda* spp.

神奈川県	2006	—
	1995	
環境省	2020	—

## 【判定理由】

本属菌の発生適地である、自然植生の残る海岸が減少しているため。

## 【生育環境・生態】

秋、海岸付近の草本の生育する砂地に発生する。

## 【現状】

海岸開発や近年の大型台風被害などにより、発生環境は減少の傾向にある。

## 【国内分布】

国内各地

## 【県内分布】

平塚市

## 【存続を脅かす要因】

海岸開発、海岸浸食、市街化

## 【特記事項】

国内からはドングリタケ *Disciseda subterranea* およびウスイロドングリタケ *D. candida* が報告されている。両種は類似した環境に発生するが、前者は後者に比べ担子胞子径が小さいことで区別される。

## 絶滅危惧 I 類

## ケシボウズタケ属

*Tulostoma* spp.

神奈川県	2006	絶滅危惧 I A 類
	1995	
環境省	2020	—

## 【判定理由】

本属菌の発生適地である、自然植生の残る海岸が減少しているため。

## 【生育環境・生態】

海岸付近の草本の生育する砂地に発生する。

## 【現状】

海岸開発や近年の大型台風被害などにより、発生環境は減少の傾向にある。

## 【国内分布】

国内各地

## 【県内分布】

平塚市、大磯町

## 【存続を脅かす要因】

海岸開発、海岸浸食

## 【特記事項】

国内産本属菌の多くはイネか草本の優先する海浜植生に特有の種で、その発生環境は開発や台風などの気象災害による影響を受けやすい。そのため、数少ない県内産地の積極的な保全が望まれる。

情報不足			
<b>コゲチャベニヒダタケ</b>		神奈川県	2006 1995
<i>Pluteus phaeocephalus</i> Har. Takah.		環境省	2020

**【判定理由】**  
産地がごく限られ、標本も少ない上に、本種の発生に関する全国的な情報が不足しているため。

**【生育環境・生態】**  
春から秋にかけて、林内の広葉樹落枝上に発生する。腐生菌。

**【現状】**  
発生地の環境は比較的良好であるが、生育状況のモニタリングには、定期的な調査の継続が必要。

**【国内分布】**  
不明

**【県内分布】**  
小田原市

**【存続を脅かす要因】**  
産地局限、森林衰退、森林伐採

**【特記事項】**  
2001年に小田原市産標本に基づき記載された種。タイプ産地では現在でも稀に発生が確認されるが、全国的に認知度が低く、分布や生態に関する情報は十分でない。

**【文献等】**  
Takahashi, H., 2001. Notes on new Agaricales of Japan 2. *Mycoscience*, **42**: 347-353.

テングタケ科

準絶滅危惧			
<b>アオミドリタマゴテングタケ</b>		神奈川県	2006 1995
<i>Amanita griseoturcosa</i> T. Oda, C. Tanaka & Tsuda		環境省	2020

**【判定理由】**  
必ずしも稀ではないが、発生子実体数は概して少なく、生育に適した良好な照葉樹林も減少傾向にあるため。

**【生育環境・生態】**  
夏から秋にかけて、シイ・カシ林の林床に子実体を形成する。外生菌根性。

**【現状】**  
現存する発生地では、近年ナラ枯れが進行し、その影響が懸念される。

**【国内分布】**  
本州以南の暖温带

**【県内分布】**  
小田原市、相模原市、大磯町、箱根町

**【存続を脅かす要因】**  
森林伐採、森林衰退、ナラ枯れ

**【特記事項】**  
本種は特徴的な色彩で比較的目的目立つ子実体を形成するが、群生することは稀である。

テングタケ科

絶滅危惧Ⅱ類			
<b>キワタゲテングタケ</b>		神奈川県	2006 1995
<i>Amanita flavofloccosa</i> Nagas. & Hongo		環境省	2020

**【判定理由】**  
産地が限られ、かつ近年の発生記録がごく少ないため。

**【生育環境・生態】**  
林内地上に単生する。腐生菌と考えられる。

**【現状】**  
発生地の環境は比較的良好であるが、生育状況のモニタリングには、定期的な調査の継続が必要である。

**【国内分布】**  
本州

**【県内分布】**  
小田原市、大磯町、逗子市

**【存続を脅かす要因】**  
森林伐採、森林衰退、市街化

**【特記事項】**  
本種に酷似したキヒダキワタゲテングタケと明確に区別されていない場合が多い。キヒダキワタゲテングタケは子実体表面の粉状片を吸い込むと激しくしゃみなどのアレルギー症状を起こすので注意が必要である。

菌類

絶滅危惧Ⅰ類

ハイカグラテングタケ

*Amanita sinensis* Zhu L. Yang

神奈川県	2006	—
	1995	—
環境省	2020	—

【判定理由】

子実体は大型で目立つにもかかわらず、県内における標本記録が僅少であるため。

【生育環境・生態】

夏から秋にかけて、様々な林内の樹下に発生する。

【現状】

市街地に隣接した発生地もあり、発生環境は必ずしも安定的とは言えない。

【国内分布】

国内各地

【県内分布】

川崎市、小田原市

【存続を脅かす要因】

森林伐採、市街化、道路建設

【特記事項】

時に傘の直径20 cmを超える大型菌で、同定も容易であるが、県内では発生記録は少なく、稀産種であると考えられる。

絶滅危惧Ⅱ類

ナメコ

*Pholiota microspora* (Berk.) Sacc.

神奈川県	2006	準絶滅危惧
	1995	—
環境省	2020	—

【判定理由】

発生に適した環境が減少傾向にあり、確認例もごく限られるため。

【生育環境・生態】

秋、主に冷温帯ブナ・ミズナラ林の広葉樹倒木上に発生する。腐生菌。

【現状】

丹沢山地において発生が確認されているが、安定的に発生しているとは言えない状況である。

【国内分布】

国内各地

【県内分布】

山北町

【存続を脅かす要因】

森林衰退、シカ影響、温暖化

【特記事項】

ブナ倒木上などに発生するが、県内における近年の発生確認例は非常に限られ、生育状況も芳しくない。

準絶滅危惧

ヒメムサシタケ属

*Alnicola* spp.

神奈川県	2006	準絶滅危惧
	1995	—
環境省	2020	—

【判定理由】

ハンノキ属樹木に特異的に菌根共生する菌であり、生育に適した環境が減少傾向にあるため。

【生育環境・生態】

湿原や林縁のハンノキ属樹木の樹下に子実体を形成する。外生菌根性。

【現状】

現存する発生地は一部保護されているが、保護対象区域外の発生地は土地造成などにより消失の可能性がある。

【国内分布】

不詳

【県内分布】

川崎市、小田原市、湯河原町、箱根町、山北町

【存続を脅かす要因】

森林衰退、土地造成、湿地開発

【特記事項】

日本では未だ本属のまとまった分類学的検討が実施されておらず、今後、種レベルでの系統分類学的解析が望まれるが、湿原環境に依存する種については保全が必要であり、属レベルで注目を要す。

準絶滅危惧								
<p><b>フジイロアマタケ</b></p> <p><i>Baeospora myriadophylla</i> (Peck) Singer</p>	<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td rowspan="2" style="text-align: center;">神奈川県</td> <td style="text-align: center;">2006</td> <td rowspan="2" style="text-align: center;">準絶滅危惧</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">1995</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">環境省</td> <td style="text-align: center;">2020</td> <td style="text-align: center;">—</td> </tr> </table>	神奈川県	2006	準絶滅危惧	1995	環境省	2020	—
神奈川県	2006		準絶滅危惧					
	1995							
環境省	2020	—						
<p>【判定理由】 本種の発生環境である温帯性ブナ林が減少傾向にあり、全国的にも発生記録が少ないため。</p> <p>【生育環境・生態】 秋、主にブナ倒木上に子実体を形成する。腐生菌。</p> <p>【現状】 丹沢山地において発生が確認されているが、非常に稀。</p>	<p>【国内分布】 本州</p> <p>【県内分布】 山北町、清川村</p> <p>【存続を脅かす要因】 森林衰退、シカ影響、温暖化</p> <p>【特記事項】 2006年時の神奈川県レッドデータ生物調査では比較的多くの標本に基づく発生が確認されたが、それ以降の標本記録は少ない。発生環境であるブナ倒木の残る森林環境の包括的な保全が必要である。</p>							

ヒメノガステル科

注目種									
<p><b>ケコガサタケ属の一種</b></p> <p><i>Galerina</i> sp.</p>	<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td rowspan="2" style="text-align: center;">神奈川県</td> <td style="text-align: center;">2006</td> <td style="text-align: center;">—</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">1995</td> <td style="text-align: center;">—</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">環境省</td> <td style="text-align: center;">2020</td> <td style="text-align: center;">—</td> </tr> </table>	神奈川県	2006	—	1995	—	環境省	2020	—
神奈川県	2006		—						
	1995	—							
環境省	2020	—							
<p>【判定理由】 県内では僅少な環境(低層湿原)に発生する菌であるため。</p> <p>【生育環境・生態】 ミズゴケ類が優先する湿原の枯死したススキの地中部より発生する。</p> <p>【現状】 本菌の発生地では湿原の乾燥化・陸化が徐々に進行しており、保全のためには環境維持のための積極的な方策が必要と考えられる。</p>	<p>【国内分布】 不明</p> <p>【県内分布】 箱根町</p> <p>【存続を脅かす要因】 湿地開発、水質汚濁、温暖化、踏みつけ</p> <p>【特記事項】 2020年3月に実施された調査で確認された、小～中型、褐色のケコガサタケ属菌である(標本番号:KPM-NC 28160)。今後、発生状況の継続調査と系統分類学的検討が望まれる。</p> <p>📷写真あり: 口絵9)</p>								

所属科未確定

絶滅危惧Ⅱ類								
<p><b>和名なし&lt;シンネマトミクス・キャピタートゥス&gt;</b></p> <p><i>Synnematomyces capitatus</i> Kobayasi</p>	<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td rowspan="2" style="text-align: center;">神奈川県</td> <td style="text-align: center;">2006</td> <td rowspan="2" style="text-align: center;">準絶滅危惧</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">1995</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">環境省</td> <td style="text-align: center;">2020</td> <td style="text-align: center;">—</td> </tr> </table>	神奈川県	2006	準絶滅危惧	1995	環境省	2020	—
神奈川県	2006		準絶滅危惧					
	1995							
環境省	2020	—						
<p>【判定理由】 発生に適した環境が非常に限定的であり、実際の産地もごく限られているため。</p> <p>【生育環境・生態】 梅雨期に、森林内の溪流沿いの多湿な環境下の倒木から発生する。腐生菌。</p> <p>【現状】 丹沢山地において発生が確認されているが、産地における発生状況は良好。</p>	<p>【国内分布】 本州</p> <p>【県内分布】 山北町</p> <p>【存続を脅かす要因】 森林衰退、シカ影響、温暖化、ダム建設</p> <p>【特記事項】 自然度の高い森林内の沢筋の倒木から発生する稀菌で、短い柄の先端に栄養繁殖組織と考えられる褐色楕円体の構造を房状に付ける。担子菌類のアナモルフとも考えられているが、知見は限られており、今後の詳細な研究が待たれる。</p> <p>📷写真あり: 口絵9)</p>							

準絶滅危惧

アシナガイグチ

*Boletellus elatus* Nagas.

神奈川県	2006	準絶滅危惧
	1995	
環境省	2020	—

【判定理由】

発生に適したシイ・カン極相林が減少傾向にあり、子実体の発生記録も比較的少ないため。

【生育環境・生態】

夏から初秋にかけて、シイ・カン類の優先する極相林の地上に発生する大型菌。外生菌根菌。

【現状】

子実体発生頻度は高くないものの、これまで発生環境は比較的良好に保たれていたが、近年ナラ枯れが進行し、本種の生育への影響が懸念される。

【国内分布】

本州以南の暖温帯

【県内分布】

小田原市、逗子市

【存続を脅かす要因】

森林伐採、森林衰退、温暖化、ナラ枯れ

【特記事項】

著しく長く、しばしば湾曲した柄を持つ特徴的な子実体を形成する種で、人目に付きやすいが、県内の発生は局所的である。

絶滅危惧Ⅱ類

ヒロウラベニイロガワリ

*Boletus generosus* Har. Takah.

神奈川県	2006	準絶滅危惧
	1995	
環境省	2020	—

【判定理由】

分布が局所的で発生確認例も比較的少ないため。

【生育環境・生態】

夏から秋にかけて、低地のブナ科樹木の優先する林内地上に発生する中～大型のイグチ類。鮮やかな緋色の傘が特徴的で、柄の上部には網目模様がある。外生菌根菌。

【現状】

県内では複数地域で発生が確認されているが、いずれの産地においても発生はやや稀である。

【国内分布】

本州

【県内分布】

相模原市、秦野市、厚木市、小田原市

【存続を脅かす要因】

森林伐採、森林衰退、温暖化、ナラ枯れ

【特記事項】

比較的大型で鮮やかな子実体を形成し、発生時の探索は容易にもかかわらず、発生記録は多くない。しばしば類似種との識別な困難な場合がある。

〈写真あり：口絵9〉

準絶滅危惧

クロムラサキニガイグチ

*Tylopilus fulgineoviolaceus* Har. Takah.

神奈川県	2006	—
	1995	
環境省	2020	—

【判定理由】

産地が南関東及びその周辺域に限定される種で、環境への依存性も高いと考えられるため。

【生育環境・生態】

夏から秋にかけて、シイ・カン老齢木の優先する林内地上に発生する。外生菌根菌。

【現状】

発生地の環境は概して良好であるが、今後ナラ枯れによる影響が懸念される。

【国内分布】

東京都、神奈川県、静岡(伊豆半島)

【県内分布】

小田原市、逗子市、平塚市、真鶴町、箱根町

【存続を脅かす要因】

森林伐採、森林衰退、温暖化、ナラ枯れ

【特記事項】

本種は2007年に小田原市産の標本をホロタイプとして新種記載された中型菌である。

【文献等】

Takahashi, H., 2007. Five new species of the Boletaceae from Japan. *Mycoscience*, **48**: 90–99.

注目種				
<b>ジャガイモタケ</b>		<b>神奈川県</b>	2006	準絶滅危惧
			1995	/
<i>Heliogaster columellifer</i> (Kobayasi) Orihara & Iwase		<b>環境省</b>	2020	—

**【判定理由】**  
近年、比較的多くの発生地が確認され、現時点では絶滅の可能性は低いことから、ランク変更を行った。

**【生育環境・生態】**  
初夏～初冬にかけて、様々な林内に発生する地下生菌だが、地表に子実体が露出する場合が多い。外生菌根菌と考えられている。

**【現状】**  
各地で必ずしも安定的に発生するわけではないが、決して稀な種ではない。

**【国内分布】**  
日本全土

**【県内分布】**  
厚木市、小田原市、川崎市、平塚市、南足柄市、横浜市、箱根町

**【存続を脅かす要因】**  
森林伐採、市街化、ナラ枯れ、マツ枯れ

**【特記事項】**  
近年、本種の発生状況の調査や系統分類学的研究が進み、国内における本種の分布の実態などが明らかになりつつある。本種が安定して生育可能な環境の維持は、多くの希少種保全の観点からも有意義であると考えられる。

絶滅危惧Ⅱ類				
<b>チャイボホシミノタマタケ</b>		<b>神奈川県</b>	2006	—
			1995	/
<i>Octaviania durianelloides</i> Orihara		<b>環境省</b>	2020	—

**【判定理由】**  
県内産地が僅少で、かつ発生状況も安定的でないため。

**【生育環境・生態】**  
ブナ科樹木(シイ・カシ・ナラ類)の優占する林内に地下生～半地上生の子実体を形成する。外生菌根菌と考えられる。

**【現状】**  
同一地点で複数年発生することは多くない。また、県内産地では近年ナラ枯れが進行し、その影響が懸念される。

**【国内分布】**  
本州、北海道

**【県内分布】**  
南足柄市、小田原市

**【存続を脅かす要因】**  
森林伐採、森林衰退、温暖化、ナラ枯れ

**【特記事項】**  
2012年に南足柄市産の標本をホロタイプとして新種記載された菌で、子実体は成熟時、表面に褐色の微いぼ状突起を有する点为本属菌としては特異である。

**【文献等】**  
Orihara, T., M. E. Smith, N. Shimomura, K. Iwase & N. Maekawa, 2012. Diversity and systematics of the sequestrate genus *Octaviania* in Japan: two new subgenera and eleven new species. *Persoonia*, **28**: 85–112.

絶滅危惧Ⅰ類				
<b>ミヤマホシミノタマタケ</b>		<b>神奈川県</b>	2006	—
			1995	/
<i>Octaviania japonimontana</i> Orihara		<b>環境省</b>	2020	—

**【判定理由】**  
発生環境が冷温帯ブナ林にほぼ限定され、関東南部では発生に適した環境がごく限られるため。

**【生育環境・生態】**  
夏から秋にかけて、山地帯のブナ・ミズナラ樹下に地下生～半地上生の子実体を形成する。外生菌根菌と考えられる。

**【現状】**  
シカ食害による宿主樹木(ブナ・ミズナラ)の衰退が懸念されるが、近年丹沢山地の複数箇所が発生が確認された。

☞写真あり: 口絵9)

**【国内分布】**  
国内各地

**【県内分布】**  
山北町、清川村

**【存続を脅かす要因】**  
森林衰退、シカ影響、温暖化

**【特記事項】**  
2012年に新種記載された菌で、2019年に南関東では初めて、丹沢山地で発生が確認された。産地におけるシカ食害からの植生保護が、本種の保全にも重要である。

**【文献等】**  
Orihara, T., M. E. Smith, N. Shimomura, K. Iwase & N. Maekawa, 2012. Diversity and systematics of the sequestrate genus *Octaviania* in Japan: two new subgenera and eleven new species. *Persoonia*, **28**: 85–112.  
Orihara, T., R. Healy, A. Corrales & M. E. Smith, N. Shimomura, K. Iwase, N. Maekawa, 2021. Multilocus phylogenies reveal three new truffle-like taxa and the traces of interspecific hybridization in *Octaviania* (Boletaceae, Boletales). *IMA Fungus* 12: Article number: 14

絶滅危惧Ⅰ類

タマノリイグチ

*Pseudoboletus astraeicola* (Imazeki) Šutara

神奈川県	2006	絶滅危惧Ⅱ類
	1995	
環境省	2020	—

【判定理由】

全国的に稀な菌で、県内でも発生確率がごく限られるため。

【生育環境・生態】

夏、林内の地中に生じたツチグリ *Astraeus ryoocheoninii* 子実体から発生する菌寄生菌。

【現状】

宿主であるツチグリは国内各地でごく普通に見られるが、本種の発生は稀である。県内の産地においても、発生状況は安定的ではない。

【国内分布】

国内各地

【県内分布】

秦野市、平塚市、横浜市、清川村

【存続を脅かす要因】

森林伐採、森林衰退、道路建設、ナラ枯れ

【特記事項】

林内地中に発生するツチグリ幼菌から発生する、特異な生態の菌である。本種は発生頻度が少ない上に、地味な色合いのため発見がやや難しい。

ショウロ科

注目種

ショウロ

*Rhizopogon roseolus* (Corda) Th. Fr.

神奈川県	2006	絶滅危惧Ⅱ類
	1995	
環境省	2020	—

【判定理由】

生育に適した海岸近くのクロマツ林は減少しているものの、近年、県内の複数地域での継続的な発生が確認されたため、ランクの見直しを行った。

【生育環境・生態】

春および秋に、海岸付近の比較的若齢のクロマツ林を好んで発生する地下生菌。外生菌根性。

【現状】

折原ほか(2014)により県内の複数地域の海岸付近のクロマツ樹下で発生が確認された。

【国内分布】

国内各地

【県内分布】

横浜市、茅ヶ崎市、平塚市、藤沢市、大磯町

【存続を脅かす要因】

海岸開発、自然遷移、道路建設、土地造成

【特記事項】

本種はかつて海岸付近のクロマツ防砂林に多産し、県内でも食用きのことして利用されていた。近年では生育に適した環境が減少し、本種の発生量は減少したと考えられるが、県内各地で発生が確認されており、直ちに絶滅が危惧される状況ではない。

【文献等】

折原貴道・岡田豊太郎・大宮司俊彦・高木 望, 2014. 神奈川県におけるショウロの発生状況. 神奈川県立博物館研究報告(自然科学), (43): 63-66.

ボトリオバシディウム科

絶滅危惧Ⅱ類

タブノキキハダカビ

*Haplotrichum croceum* (Mont.) Partr. & Morgan-Jones

神奈川県	2006	絶滅危惧ⅠA類
	1995	
環境省	2020	絶滅危惧Ⅱ類

【判定理由】

海岸沿いのタブ等の照葉樹の老齢林に生息するものだが、倒木に発生する腐生性の分類群であるため緊急に保護を要すものではない。現在までに生息環境が顕著に悪化した等の問題も無いため、Ⅱ類での保全で妥当と考えられる。

【生育環境・生態】

海岸近くのタブ等の照葉樹の大径木倒木上に発生する腐生菌。

【現状】

全国的に発生記録の少ない菌であるが、県内の発生環境における生育環境の急速な悪化は確認されており、直ちに絶滅が危惧される状況ではない。

【国内分布】

南西諸島(屋久島)、九州、小笠原諸島、伊豆諸島、本州

【県内分布】

大磯町、真鶴町

【存続を脅かす要因】

森林伐採、森林衰退

【特記事項】

本種は、1970年代に記載されて以降、長年発生が確認されていなかったが、近年、神奈川県内から発生が確認された。

📷写真あり: 口絵9

情報不足				
<b>ヤナギノアカコウヤクタケ</b>		<b>神奈川県</b>	2006 1995	—
<i>Cytidia salicina</i> (Fr.) Burt		<b>環境省</b>	2020	—

**【判定理由】**  
県内では発生に適した環境が限られ、実際の採集記録もごく少ないが、文献情報が限られ認知度が低く、実際の発生状況が不明のため。

**【生育環境・生態】**  
冷温帯以北のヤナギ属樹木成木または枯死木上に発生する背着生の腐生菌。

**【現状】**  
丹沢山地において発生が確認されているが、認知度が低く、標本記録も少ないため、正確な発生状況は定かでない。

**【国内分布】**  
本州、北海道

**【県内分布】**  
山北町

**【存続を脅かす要因】**  
森林衰退、シカ影響、温暖化

**【特記事項】**  
北方系の菌で、県内では丹沢からわずかに記録がある。稀な菌と考えられるが、認知度は低く、実際の発生状況の把握には今後のさらなる調査が必要。

タバコウロコタケ科

絶滅危惧 I 類					
<b>ラッコタケ</b>		<b>神奈川県</b>	2006 1995	絶滅危惧 I A 類	
<i>Inotus flavidus</i> (Berk.) Ryv.		<b>環境省</b>	2020	—	

**【判定理由】**  
発生環境が限られ、中型で野外での認識が比較的容易であるにもかかわらず、近年発見例が著しく減少しているため。

**【生育環境・生態】**  
ブナ林の広葉樹腐朽木上に発生するが、産地は限られ、環境異存性が高い種と考えられる。

**【現状】**  
丹沢山地の複数地点から記録があるが、2006年以降の採集記録は無く、生育環境の悪化や個体数の著しい減少が危惧される。

**【国内分布】**  
本州、北海道

**【県内分布】**  
山北町、清川村

**【存続を脅かす要因】**  
森林衰退、シカ影響、温暖化

**【特記事項】**  
暗褐色の剛毛体に密に被われた傘を有する硬質菌で、発生は産地のブナ・ミズナラ帯に限られる。ヒマラヤにも分布し、生物地理的にも興味深い菌である。

タバコウロコタケ科

絶滅危惧 I 類					
<b>ナンバンオオカワウソタケ</b>		<b>神奈川県</b>	2006 1995	準絶滅危惧	
<i>Inotus patouillardii</i> (Rick) Imazeki		<b>環境省</b>	2020	絶滅危惧 II 類	

**【判定理由】**  
暖温帯照葉樹林の老齢木上に発生する中～大型菌だが、県内における発生に適した環境は著しく減少しており、近年の確実な発生例はない。特に絶滅が危惧される種の一つである。

**【生育環境・生態】**  
照葉樹林のタブノキなどの老齢木上に発生する褐色腐朽菌。傘はしばしば直径10 cmを超える。

**【現状】**  
1990年代に採集されて以降、確実な発生記録はないものと思われる。社寺林などの人里に近い照葉樹極相林を好む菌と考えられ、発生に適した環境の保全が不可欠である。

**【国内分布】**  
南方系の種であるが、詳細な分布は不明

**【県内分布】**  
鎌倉市、葉山町

**【存続を脅かす要因】**  
産地局限、市街化、森林伐採、道路建設

**【特記事項】**  
子実体は比較的大型かつ長期間残存するため、発見は容易であるにもかかわらず、20年以上にわたり標本の採集記録が無く、絶滅が危惧される。文献情報にも乏しいが、何よりも発生に適した巨樹の残る照葉樹林の保全が急務である。

絶滅危惧Ⅰ類

オニカワウソタケ

*Inonotus ludovicianus* (Pat.) Murrill

神奈川県	2006	—
	1995	—
環境省	2020	—

【判定理由】

本種の生育に適した原生的な森林環境に限られている上に、近年の発生確認例が無いため。

【生育環境・生態】

ブナ科樹木(カシ類)の老齢木上に発生する大型の木材腐朽菌。原生的な森林を好む傾向にある。

【現状】

『神RDB06』の出版以後、県内における新たな発生の報告は無い。

【国内分布】

関東地方以南の暖温帯

【県内分布】

逗子市

【存続を脅かす要因】

産地局限、森林衰退、森林伐採

【特記事項】

大型で比較的目立つ菌であるが、県内では過去に数例が確認されたのみで近年の発生報告は無く、特に絶滅が危惧される。

絶滅危惧Ⅱ類

マクラタケ

*Pseudoinonotus dryadeus* (Pers.) T. Wagner & M. Fisch.

神奈川県	2006	準絶滅危惧
	1995	—
環境省	2020	—

【判定理由】

発生環境に限られ、大型であるにもかかわらず発見例の少ない稀な種であるため。

【生育環境・生態】

主に山地のブナ、ミズナラなどの広葉樹の枯死木の基部に発生する。例外的に、照葉樹林内のタブノキから発生した例もある。腐生菌。

【現状】

直径20 cmを超える大型菌であるが、発生は稀。丹沢山地にも分布している可能性はあるが、確実な標本記録はない。主な発生環境と考えられるブナ・ミズナラ林の継続的な保全が必要である。

【国内分布】

本州、北海道

【県内分布】

大磯町

【存続を脅かす要因】

森林衰退、シカ影響、温暖化

【特記事項】

本種は北方系の菌と考えられるが、県内で知られる発生環境は低地の常緑広葉樹林である。丹沢山地に隣接する山梨県域から採集されていることから、丹沢にも分布する可能性はあり、今後の探索調査が必要である。

絶滅危惧Ⅰ類

ツヤナシマンネンタケ

*Pyrrhoderma sendaiense* (Yasuda) Imazeki

神奈川県	2006	絶滅危惧ⅠA類
	1995	—
環境省	2020	—

【判定理由】

発生環境がブナ帯に限られ、発生も稀な種であるため。

【生育環境・生態】

ブナ倒木上に発生する。傘は硬質で、暗褐色～黒褐色。腐生菌。

【現状】

丹沢山地において発生が確認されているが、非常に稀。近年の確実な発生記録はなく、発生状況は不明である。

【国内分布】

国内各地

【県内分布】

山北町

【存続を脅かす要因】

森林衰退、シカ影響

【特記事項】

本種は全国的に発生が稀である。発生環境であるブナ林を良好な状態に保全することが第一と考えられる。

絶滅危惧Ⅱ類		神奈川県		2006	絶滅危惧ⅠA類
ムサシタケ	<i>Pyrrhoderma adamantinum</i> (Berk.) Imazeki			1995	
				2020	
<p>【判定理由】 これまでに複数の発生記録があるが、発生環境が限定的で稀な菌と考えられるため。</p> <p>【生育環境・生態】 暖温帯照葉樹林の広葉樹枯死木上より発生する 경우가多いが、県内からは冷温帯の森林内からも発生記録がある。</p> <p>【現状】 近年の発生記録は僅少で、分布および生育状況の実態は不明である。</p>		<p>【国内分布】 本州以南の暖温帯</p> <p>【県内分布】 山北町、大磯町、清川村</p> <p>【存続を脅かす要因】 森林衰退、森林伐採、シカ影響</p> <p>【特記事項】 本種は一般的に暖温帯照葉樹林内の広葉樹の根際から発生することが多い。そのため、丹沢の冷温帯林からの過去の記録については、今後、類似種ツヤナシマンネンタケとの異同も含め、DNA情報の比較解析を含めた検証が必要と考えられる。</p>			

絶滅危惧Ⅱ類		神奈川県		2006	準絶滅危惧
コガネカワラタケ	<i>Corioloopsis glabrorigens</i> (Lloyd) Nunez & Ryvar den			1995	
				2020	
<p>【判定理由】 神奈川県は本種の分布のほぼ北限域と考えられ、生育地も局所的であるため。</p> <p>【生育環境・生態】 暖温帯性の照葉樹林内の倒木上に複数の子実体が重なり合って発生する。腐生菌。</p> <p>【現状】 県内では、過去には真鶴町からのみ記録されていたが、近年、小田原市においても発生が確認された。</p>		<p>【国内分布】 関東地方以南(暖温帯から亜熱帯)</p> <p>【県内分布】 真鶴町、小田原市、相模原市</p> <p>【存続を脅かす要因】 森林衰退、森林伐採</p> <p>【特記事項】 南方系の種と考えられ、県下における発生確認例は限られる。しかし、温暖化の影響か、近年では県内でも複数の産地が新たに確認されている。</p>			

準絶滅危惧		神奈川県		2006	準絶滅危惧
サビハチノスタケ	<i>Echinochaete russiceps</i> (Berk. & Broome) D.A. Reid			1995	
				2020	
<p>【判定理由】 発生が稀と考えられるため。</p> <p>【生育環境・生態】 暖温帯の照葉樹林の中でも、環境が良好な状態に保たれた森林の枯死木上に発生する。腐生菌。</p> <p>【現状】 県内では複数産地において発生が記録されているが、いずれの地点でも発生は散発的と考えられる。</p>		<p>【国内分布】 本州暖温帯以南</p> <p>【県内分布】 相模原市、平塚市、小田原市</p> <p>【存続を脅かす要因】 森林衰退、森林伐採、産地局限</p> <p>【特記事項】 熱帯から暖温帯域まで広く分布し、やや稀な種である。</p>			

菌類

準絶滅危惧

エビタケ

*Ganoderma tsunodae* Yasuda

神奈川県	2006	絶滅危惧 I A 類
	1995	
環境省	2020	—

【判定理由】

発生環境である冷温帯ブナ林が衰退傾向にあるため。

【生育環境・生態】

ブナの立ち枯れ上に発生する腐生菌。

【現状】

丹沢山地においては、比較的ふつうに見られ、直ちに絶滅が危惧される状況ではないが、ブナ林特有の菌であり、生育環境の安定的維持が望まれる。

【国内分布】

本州、九州

【県内分布】

山北町、清川村

【存続を脅かす要因】

森林衰退、シカ影響、温暖化

【特記事項】

丹沢山地のブナ林では広く発生が確認されている。環境評価の指標として、今後のモニタリングにも有用であると考えられる。

絶滅危惧 II 類

フルイタケ

*Hexagonia tenuis* J.M. Hook

神奈川県	2006	準絶滅危惧
	1995	
環境省	2020	—

【判定理由】

温帯～亜熱帯性の菌で、神奈川県は本種の分布のほぼ北限域にあたり、生育地も局所的であるため。

【生育環境・生態】

照葉樹林内の倒木上に発生する腐生菌。傘の裏の管孔がふるいの目のように比較的大型であることが特徴。

【現状】

県内産地では比較的安定して発生しているが、分布は局所的である。

【国内分布】

本州以南の暖温帯、亜熱帯

【県内分布】

真鶴町、横須賀市

【存続を脅かす要因】

森林伐採、道路建設、市街化

【特記事項】

県内の産地である真鶴半島では継続的に発生が見られているが、同地は本種の分布のほぼ北限と考えられ、今後の生育状況の変化を注視していく必要がある。

準絶滅危惧

アカハチノスタケ

*Pseudofavolus cucullatus* (Mont.) Pat.

神奈川県	2006	準絶滅危惧
	1995	
環境省	2020	—

【判定理由】

山地性の菌で、県内の分布域が限られるため。

【生育環境・生態】

冷温帯林の枯死木もしくは生木上に発生する。腐生菌。

【現状】

丹沢山地において発生が確認されており、産地では比較的頻繁に発生が確認されている。

【国内分布】

国内各地

【県内分布】

山北町、清川村

【存続を脅かす要因】

森林衰退、シカ影響、温暖化

【特記事項】

ブナ・ミズナラ林を主とする冷温帯特有の種と考えられる。現状では絶滅の可能性は低いですが、本種の発生状況を継続的に調査することで、冷温帯林の環境変化の把握に繋がることが期待される。

絶滅危惧Ⅱ類									
<div style="background-color: #333; color: white; padding: 2px; text-align: center; font-weight: bold;">ルリハツタケ</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;"><i>Lactarius subindigo</i> Verbeken &amp; E. Horak</div>	<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td rowspan="2" style="text-align: center;">神奈川県</td> <td style="text-align: center;">2006</td> <td style="text-align: center;">—</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">1995</td> <td style="text-align: center;">—</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">環境省</td> <td style="text-align: center;">2020</td> <td style="text-align: center;">—</td> </tr> </table>	神奈川県	2006	—	1995	—	環境省	2020	—
神奈川県	2006		—						
	1995	—							
環境省	2020	—							
<p><b>【判定理由】</b> 鮮やかで目立つ子実体を形成するにもかかわらず、発見例が比較的少なく、稀であると考えられるため。</p> <p><b>【生育環境・生態】</b> 夏から秋にかけて、暖温帯のブナ科樹木の優占する林内に発生する。外生菌根菌。</p> <p><b>【現状】</b> 概して子実体の発生は各地で稀であるが、年変動が大きい。継続的に発生が確認される産地はごく限られる。</p>	<p><b>【国内分布】</b> 国内各地</p> <p><b>【県内分布】</b> 小田原市、大磯町、箱根町</p> <p><b>【存続を脅かす要因】</b> 森林衰退、森林伐採、温暖化、ナラ枯れ</p> <p><b>【特記事項】</b> 県内の複数地点で発生が確認されているが、子実体の発生はやや稀で、発生状況の継続的なモニタリングが困難な種である。</p> <p>📷 写真あり: 口絵9)</p>								

絶滅危惧Ⅱ類									
<div style="background-color: #333; color: white; padding: 2px; text-align: center; font-weight: bold;">ハツタケ</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;"><i>Lactarius hatsudake</i> Nobuj. Tanaka</div>	<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td rowspan="2" style="text-align: center;">神奈川県</td> <td style="text-align: center;">2006</td> <td style="text-align: center;">—</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">1995</td> <td style="text-align: center;">—</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">環境省</td> <td style="text-align: center;">2020</td> <td style="text-align: center;">—</td> </tr> </table>	神奈川県	2006	—	1995	—	環境省	2020	—
神奈川県	2006		—						
	1995	—							
環境省	2020	—							
<p><b>【判定理由】</b> 本種の発生に適したマツ林が減少傾向にあるため。</p> <p><b>【生育環境・生態】</b> 秋に比較的若齢のアカマツ林内地上に発生する。外生菌根性。</p> <p><b>【現状】</b> 人間による維持管理のなされたアカマツ若齢林が減少したことにより、県内での発生数は著しく減少していると考えられる。</p>	<p><b>【国内分布】</b> 国内各地</p> <p><b>【県内分布】</b> 相模原市、真鶴町、湯河原町</p> <p><b>【存続を脅かす要因】</b> 森林衰退、自然遷移、マツ枯れ</p> <p><b>【特記事項】</b> 国内では古くから食用菌として広く知られてきた種であるが、マツ林の維持管理がなされなくなったことにより、発生は稀になりつつある。</p>								

絶滅危惧Ⅱ類									
<div style="background-color: #333; color: white; padding: 2px; text-align: center; font-weight: bold;">モルガンツチガキ</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;"><i>Geastrum morganii</i> Lloyd</div>	<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td rowspan="2" style="text-align: center;">神奈川県</td> <td style="text-align: center;">2006</td> <td style="text-align: center;">—</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">1995</td> <td style="text-align: center;">—</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">環境省</td> <td style="text-align: center;">2020</td> <td style="text-align: center;">—</td> </tr> </table>	神奈川県	2006	—	1995	—	環境省	2020	—
神奈川県	2006		—						
	1995	—							
環境省	2020	—							
<p><b>【判定理由】</b> 特徴的な形態の子実体を形成するにもかかわらず、発見例が少なく、稀産種と考えられるため。</p> <p><b>【生育環境・生態】</b> 腐植層の堆積した広葉樹林内地上に発生する腹菌型の腐生菌。担子胞子が内部に形成される袋状の内皮の頂部は著しく突出し、孔縁には不規則な折り目がある。</p> <p><b>【現状】</b> 津久井、神武寺、高麗山などにおいて発生が確認されているが、非常に稀。</p>	<p><b>【国内分布】</b> 本州</p> <p><b>【県内分布】</b> 相模原市、逗子市、大磯町</p> <p><b>【存続を脅かす要因】</b> 森林衰退、道路建設、市街化</p> <p><b>【特記事項】</b> 本種は特徴的な外部形態のためにヒメツチグリ属の菌としては同定は比較的容易であるが、全国的に認知度が低く、国内における発生状況は十分に把握されていない。県内での発見例はごく散発的である。</p>								

菌類

絶滅危惧Ⅱ類

アカイカタケ

*Aseroe rubra* Labill.

神奈川県	2006	準絶滅危惧
	1995	
環境省	2020	—

【判定理由】

比較的認知度の高い種であるが、発見例が少なく、稀であると考えられるため。

【生育環境・生態】

主に梅雨期の高温多湿な時期に、腐植層の堆積した広葉樹林内地上に発生する腐生菌。

【現状】

各地において、子実体の発生記録はごく散発的である。子実体は特徴的な外観を呈し非常に目立つが、成長し始めて数時間のうちに萎れてしまうため、発生状況の確認は難しい。

【国内分布】

本州以南の温帯および亜熱帯

【県内分布】

逗子市、小田原市

【存続を脅かす要因】

森林衰退、道路建設、市街化

【特記事項】

本種が子実体の発生期間が著しく短く、正確な発生状況の把握は難しいが、小田原市内での20年以上にわたる継続的な菌類調査においても発見例は2例のみであり、子実体の発生は稀であると考えられる。

ケリノミケス科

情報不足

和名なし(ケリノミケス・パリドウス近縁種)

*Cerinomyces* cf. *pallidus* G.W. Martin

神奈川県	2006	準絶滅危惧
	1995	
環境省	2020	—

【判定理由】

発生に適した温帯の環境が減少傾向にあり、確認例もごく限られるため。

【生育環境・生態】

温帯の広葉樹や針葉樹の倒木上に発生する。腐生菌。

【現状】

丹沢山地において発生が確認されているが、国内では長野県からも報告されている。

【国内分布】

本州

【県内分布】

山北町

【存続を脅かす要因】

森林衰退、シカ影響、温暖化

【特記事項】

アカキクラゲ目の菌であるが、コウヤクダケ型の目立たない子実体を形成するため看過されている可能性がある。2006年に長野県下のマツの落枝から正式に報告されている(Shirouzu *et al.* 2006)が、県内産の種については今後分類学的検討が望まれる。

【文献等】

Shirouzu, T., D. Hirose, Tokumasu, S. 2006. Taxonomic study of the Japanese Dacrymycetes. *Persoonia* **23**:16-34.

アポルピウム科

準絶滅危惧

ムカシオオミダレタケ

*Elmerina holophaea* (Pat.) Parmasto

神奈川県	2006	絶滅危惧Ⅱ類
	1995	
環境省	2020	—

【判定理由】

発生環境がブナ帯に限られるが、産地では安定して多数の子実体の発生が確認されているため。

【生育環境・生態】

冷温帯ブナ・ミズナラ林の広葉樹枯死木上に発生する。腐生菌と考えられる。

【現状】

丹沢山地では広範囲で発生が確認されている。

【国内分布】

国内各地

【県内分布】

山北町、清川村

【存続を脅かす要因】

森林衰退、シカ影響、温暖化

【特記事項】

キクラゲ目の菌としては特異な、サルノコシカケ型の子実体を形成し、傘裏面には肉厚で粗い不完全なひだを有する。丹沢山地のブナ林では比較的ふつうに見られるが、発生状況の変化は今後注視していくことが必要である。

☞写真あり: 口絵9

準絶滅危惧				
マユハキタケ	<i>Trichocoma paradoxa</i> Jungh.	神奈川県	2006	準絶滅危惧
			1995	
		環境省	2020	—

【判定理由】  
発生に適した環境が自然度の高い照葉樹の極相林であるため。

【生育環境・生態】  
暖温帯照葉樹林内のタブノキなどの老齢の成木または枯死木から発生する。

【現状】  
複数地点から子実体の発生が確認されており、直ちに絶滅が危惧される状況ではない。しかし、本種の発生環境は自然度の高い極相林に限定されるため、今後の発生状況を注視する必要がある。

【国内分布】  
国内各地(本州以南)

【県内分布】  
平塚市、大磯町

【存続を脅かす要因】  
産地局限、森林衰退、森林伐採

【特記事項】  
現状では、海岸近くの照葉樹林内において、安定して発生しているが、生育に適した、自然度の高い極相林は県内ではごく限られるため、十全な保全対策が望まれる。

絶滅危惧Ⅱ類				
クチキトサカタケ	<i>Ascoclavulina sakaii</i> Y. Otani	神奈川県	2006	絶滅危惧Ⅱ類
			1995	
		環境省	2020	—

【判定理由】  
生育に適したブナ倒木の多く残る森林環境が県内では減少傾向にあるため。

【生育環境・生態】  
冷温帯ブナ林のブナ倒木上に発生する。腐生菌と考えられる。

【現状】  
ブナ林に特有の菌で、各地で発生が確認されているが、県内での記録はごく僅かである。

【国内分布】  
国内各地のブナ林

【県内分布】  
山北町

【存続を脅かす要因】  
森林衰退、シカ影響、温暖化

【特記事項】  
本種は全国的に絶滅が危惧され、各地で探索がなされた結果、比較的広範囲に分布していることが判明した。しかし、県内では丹沢山地のブナ林からごく僅かな記録があるのみで、発生環境の保全が必要な状況である。

準絶滅危惧				
クリノイガワンタケ	<i>Lanzia echinophila</i> (Bull.) Korf	神奈川県	2006	準絶滅危惧
			1995	
		環境省	2020	—

【判定理由】  
発生が散発的で、発生記録も限られるため。

【生育環境・生態】  
秋に、クリの果実や殻斗(いが)上に子実体を形成する。腐生性もしくは弱寄生性の菌と考えられる。

【現状】  
県内各地で記録があるが、発生は散発的で、継続的に発生が確認されない場合が多い。

【国内分布】  
本州

【県内分布】  
横浜市、厚木市、小田原市、二宮町

【存続を脅かす要因】  
産地局限、市街化、森林伐採、土地造成

【特記事項】  
本種は発生基質が特異的であり、その探索は容易であるが、発見例は決して多くない。子実体の発生頻度にはむらがあり、各産地で継続的に発生が確認されることは少ないようである。

絶滅危惧Ⅱ類

ゴンゲンタケ

*Cudonia japonica* Yasuda

神奈川県	2006	準絶滅危惧
	1995	
環境省	2020	—

【判定理由】

本種の生育に適した原生的な自然環境が維持された落葉樹林に限られており、発生確認例も僅少であるため。

【生育環境・生態】

冷温帯落葉広葉樹林の地上に発生する腐生菌。ズキンタケ類 *Leotia* spp. に外観が似るが、やや大型で、子実体全体がくすんだ淡褐色～淡黄褐色を帯びる点が異なる。

【現状】

丹沢山地において発生が確認されているが、記録は非常に少ない。

【国内分布】

国内各地(日本特産)

【県内分布】

山北町

【存続を脅かす要因】

森林衰退、シカ影響、温暖化

【特記事項】

ブナを主とする冷温帯落葉広葉樹林に発生する子囊菌で、県内からは丹沢山地からの記録があるのみである。

アミガサタケ科

絶滅危惧Ⅰ類

テンガイカブリ

*Verpa digitaliformis* Pers.

神奈川県	2006	準絶滅危惧
	1995	
環境省	2020	—

【判定理由】

本種の生育に適した環境が維持された冷温帯～温帯性落葉樹林が現象しており、発生記録も僅少であるため。

【生育環境・生態】

春に冷温帯～温帯性落葉樹林の地上に発生する。腐生菌もしくは菌根菌。

【現状】

丹沢山地において発生が確認されているが、非常に稀。2000年代以降の発生は確認できていない。

【国内分布】

本州、北海道

【県内分布】

相模原市、山北町

【存続を脅かす要因】

森林衰退、シカ影響、温暖化

【特記事項】

比較的冷涼な環境を好む菌と考えられ、県内では過去に丹沢山地から散発的に発生が確認されているが、産地は限られ、かつ稀である。

ピロネマキン科

準絶滅危惧

ウツロイモタケ

*Hydnocystis japonica* (Kobayasi) Trappe

神奈川県	2006	準絶滅危惧
	1995	
環境省	2020	—

【判定理由】

県内では複数地域で発生が確認されているが、やや稀な菌であり、全国的にも産地が限られているため。

【生育環境・生態】

秋から初冬にかけて、各種森林内の林床に発生する子囊菌。子実体は偏球形で、子実層の大部分は外皮に覆われ、胞子の射出能力を欠くことから、広義の地下生菌に含まれる。

【現状】

県内では複数地点から散発的に発生が確認されている。比較的稀な菌であるが、直ちに絶滅が危惧される状況ではない。

【国内分布】

本州、四国、九州、南西諸島

【県内分布】

小田原市、伊勢原市、葉山町、山北町、湯河原町、清川村

【存続を脅かす要因】

森林衰退、シカ影響、イノシシ影響、産地局限

【特記事項】

1964年に鹿児島県産標本をもとに新種として記載された菌で、日本特産種である。西日本から同じ和名の別の菌(学名未確定)が知られており、混同しないよう注意が必要である。

絶滅危惧Ⅱ類										
<p style="text-align: center; font-size: 1.2em; font-weight: bold;">オオミノミミブサタケ</p> <p style="font-size: 0.8em;"><i>Wynnea macrospora</i> B. Liu, M.H. Liu &amp; J.Z. Cao</p>										
<p>【判定理由】 発生環境がブナ帯に限られ、発生も稀な種であるため。</p> <p>【生育環境・生態】 夏から秋にかけて、冷温帯ブナ・ミズナラ林に発生する。地中に菌核を形成し、そこから子実体を発生させる。菌寄生性と考えられているが詳細は不明である。</p> <p>【現状】 丹沢山地において発生記録があるが、確認例は少ない。</p>	<p>【国内分布】 本州、北海道</p> <p>【県内分布】 山北町、清川村</p> <p>【存続を脅かす要因】 森林衰退、シカ影響、温暖化</p> <p>【特記事項】 本種はナラタケ類の菌糸に寄生していると考えられているが、その詳細は不明である。平地に分布するミミブサタケ <i>W. gigantea</i> に比べ、発生は稀である。</p>	<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td rowspan="2" style="width: 15%;">神奈川県</td> <td style="width: 15%;">2006</td> <td style="width: 15%; text-align: center;">—</td> </tr> <tr> <td>1995</td> <td style="text-align: center;">—</td> </tr> <tr> <td>環境省</td> <td>2020</td> <td style="text-align: center;">—</td> </tr> </table>	神奈川県	2006	—	1995	—	環境省	2020	—
神奈川県	2006	—								
	1995	—								
環境省	2020	—								

クロチャワンタケ科

絶滅危惧Ⅱ類										
<p style="text-align: center; font-size: 1.2em; font-weight: bold;">コフキクロチャワンタケ</p> <p style="font-size: 0.8em;"><i>Korfiella karnika</i> D.C. Pant &amp; V.P. Tewari</p>										
<p>【判定理由】 産地に限られ、子実体の発生も比較的稀であるため。</p> <p>【生育環境・生態】 夏、地中の広葉樹の根から地表に柄を伸ばし、子実体を形成する。</p> <p>【現状】 多くの産地では近年ナラ枯れが進行し、その影響が懸念される。</p>	<p>【国内分布】 本州以南の暖温帯</p> <p>【県内分布】 小田原市、南足柄市、平塚市、横須賀市</p> <p>【存続を脅かす要因】 産地局限、森林衰退、森林伐採</p> <p>【特記事項】 子実体外部(托外皮)が鮮やかな濃オレンジ色で、内部の子実盤が黒色の特徴的な子実体を形成する菌。</p>	<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td rowspan="2" style="width: 15%;">神奈川県</td> <td style="width: 15%;">2006</td> <td style="width: 15%; text-align: center;">—</td> </tr> <tr> <td>1995</td> <td style="text-align: center;">—</td> </tr> <tr> <td>環境省</td> <td>2020</td> <td style="text-align: center;">—</td> </tr> </table>	神奈川県	2006	—	1995	—	環境省	2020	—
神奈川県	2006	—								
	1995	—								
環境省	2020	—								

セイヨウショウロ科

絶滅危惧Ⅰ類										
<p style="text-align: center; font-size: 1.2em; font-weight: bold;">ウスキシヨウショウロ</p> <p style="font-size: 0.8em;"><i>Tuber flavidosporum</i> H. Sasaki, A. Kinosh. &amp; Nara</p>										
<p>【判定理由】 これまでにホロタイプのみが知られている稀産種であり、新種記載以後の全国的な地下生菌探索においても追加記録が得られていないため。</p> <p>【生育環境・生態】 ヒマラヤスギ樹下に地下生の子実体を形成する。外生菌根菌と考えられる。</p> <p>【現状】 タイプ産地は造成工事により環境が改変され、タイプ標本が採集されて以降の発生記録が無く、周辺地域での類似の環境での追加記録が待たれる。</p>	<p>【国内分布】 本州(神奈川県)</p> <p>【県内分布】 川崎市</p> <p>【存続を脅かす要因】 産地局限、森林伐採、土地造成</p> <p>【特記事項】 本種はKinoshita <i>et al.</i> (2011) により "<i>Tuber</i> sp. 9" として暫定的にその存在が示され、その後Kinoshita <i>et al.</i> (2016) により新種記載された。2~3胞子性の子嚢を形成し、子嚢胞子が淡黄色である点の特徴。現状では、川崎市多摩区が唯一の産地である。</p> <p>【文献等】 Kinoshita, A., H. Sasaki &amp; K. Nara, 2011. Phylogeny and diversity of Japanese truffles (<i>Tuber</i> spp.) inferred from sequences of four nuclear loci. <i>Mycologia</i>, <b>103</b>: 779-794. Kinoshita, A., H. Sasaki &amp; K. Nara, 2016. Two new truffle species, <i>Tuber japonicum</i> and <i>Tuber flavidosporum</i> spp. nov. found from Japan. <i>Mycoscience</i>, <b>57</b>: 366-373.</p>	<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td rowspan="2" style="width: 15%;">神奈川県</td> <td style="width: 15%;">2006</td> <td style="width: 15%; text-align: center;">—</td> </tr> <tr> <td>1995</td> <td style="text-align: center;">—</td> </tr> <tr> <td>環境省</td> <td>2020</td> <td style="text-align: center;">—</td> </tr> </table>	神奈川県	2006	—	1995	—	環境省	2020	—
神奈川県	2006	—								
	1995	—								
環境省	2020	—								

注目種			
キチャセイヨウシヨウロ <i>Tuber iryudaense</i> H. Sasaki, A. Kinosh. & M. Nakajima, Orihara & Nara	神奈川県	2006	—
		1995	—
	環境省	2020	—

【判定理由】  
これまでにタイプ産地からのみ知られている稀産種であるが、新種記載されたばかりであり、当面は国内での今後の発生状況を注視することが必要であるため。

【生育環境・生態】  
スダジイ・ウラジログシ林の地中または一部地表に子実体を形成する外生菌根菌。

【現状】  
これまでに知られている生育地は極めて局所的であり、今後の森林環境の変化もしくは伐採などにより産地消失の危険性がある。

【国内分布】  
本州(神奈川県)

【県内分布】  
小田原市

【存続を脅かす要因】  
産地局限、森林衰退、森林伐採、ナラ枯れ

【特記事項】  
本種はKinoshita *et al.* (2011) により“*Tuber* sp. 2”として暫定的にその存在が示され、その後Kinoshita *et al.* (2021) により新種記載された。子実体外皮が黄褐色の柔軟毛に被われ、1胞子性の子嚢を形成することが大きな特徴。現状では、小田原市入生田が唯一の産地である。

【文献等】  
Kinoshita, A., H. Sasaki & K. Nara, 2011. Phylogeny and diversity of Japanese truffles (*Tuber* spp.) inferred from sequences of four nuclear loci. *Mycologia*, **103**: 779–794.  
Kinoshita, A., H. Sasaki, T. Orihara, M. Nakajima & K. Nara, 2021. *Tuber iryudaense* and *T. tomentosum*: Two new truffles encased in tomentose mycelium from Japan. *Mycologia*, **113**: 653–663.

ノムシタケ科

絶滅危惧 I 類			
コゴメカマキリムシタケ <i>Cordyceps mantidicola</i> Kobayasi & Shimizu	神奈川県	2006	絶滅危惧 I A 類
		1995	—
	環境省	2020	絶滅危惧 I 類

【判定理由】  
全国的に発見例が少ない希産種であるため。

【生育環境・生態】  
夏、カマキリ類の古い卵のうから発生する冬虫夏草の一種である。昆虫寄生菌。

【現状】  
本県は比較的本種の発生が多く確認されている地域であるが、それでも過去に数例の発生例があるのみである。

【国内分布】  
本州、九州

【県内分布】  
小田原市、逗子市、葉山町

【存続を脅かす要因】  
産地局限

【特記事項】  
ハラビロカマキリ、コカマキリなどの卵のうから発生する珍菌であり、全国的に絶滅が危惧される種である。卵のうに本種が寄生しているのか、内部の幼虫に寄生しているのか、その詳細な生態は明らかになっていない。

ノムシタケ科

情報不足			
ベニイモムシタケ <i>Cordyceps ootakiensis</i> Kobayasi & Shimizu	神奈川県	2006	準絶滅危惧
		1995	—
	環境省	2020	—

【判定理由】  
報告例が少なく、発生も比較的稀と考えられるため。

【生育環境・生態】  
秋、地中のガの幼虫から発生する寄生菌。

【現状】  
県内からの発生記録は局所的かつ僅少であり、近年の発生状況は不明である。

【国内分布】  
本州

【県内分布】  
愛川町

【存続を脅かす要因】  
森林衰退、産地局限

【特記事項】  
地中のチョウ目(蛾)の幼虫から、鮮やかな橙～赤色の棍棒型の子実体を発生させる。人目を惹く菌であるが、県内からの発見例は数例のみで、現在の発生状況および分布に関する知見が待たれる。

## 準絶滅危惧

## イトヒキミジンアリタケ

*Ophiocordyceps* sp.

神奈川県	2006	準絶滅危惧
	1995	
環境省	2020	—

## 【判定理由】

県内では比較的広域に発生している可能性もあるが、発見がやや困難な種であり、記録も少ないため。

## 【生育環境・生態】

林内生木の樹幹に固着したアリ類から子実体を発生させる昆虫寄生菌(冬虫夏草の一種)。

## 【現状】

県内の複数地点で発生例はあるものの、発見例は多くない。

## 【国内分布】

本州、四国

## 【県内分布】

横浜市、小田原市、松田町、箱根町

## 【存続を脅かす要因】

森林衰退、森林伐採

## 【特記事項】

林内の樹幹下部で絶命したアリ類から発生する冬虫夏草の一種で、子実体が小型で目立たないため、発見がやや困難である。時に多発するが、必ずしも同所で継続的に発生する訳ではないようである。

## 注目種

## ツチカメムシタケ

*Purpureocillium lilacinum* (Thom) Luangsa-ard, Houbraken, Hywel-Jones & Samson (= *Isaria macroscyticola* Kobayasi)

神奈川県	2006	—
	1995	—
環境省	2020	—

## 【判定理由】

本種は多様な環境に遍在する動物病原菌であるが、ごく稀にツチカメムシ類成虫に寄生し大型のシンネマ(分生子果)を形成することが知られ、県内にその産地があるため。

## 【生育環境・生態】

初夏から夏にかけて、広葉樹林内のツチカメムシに寄生し、最長4 cmに達する薄紫色のシンネマを形成する。様々な動物の病原菌として知られ、人体にも日和的に感染する可能性がある。

## 【現状】

県内の発生地では比較的安定して発生が確認されているが、全国的に産地は極めて限定的である。

## 【国内分布】

本州(東京都、神奈川県)

## 【県内分布】

横浜市、相模原市

## 【存続を脅かす要因】

産地局限、市街化、森林伐採

## 【特記事項】

ツチカメムシタケは初め *Isaria macroscyticola* Kobayasi の学名で国内から新種記載されたが、近年、世界的に広く分布する *P. lilacinum* の分生子果の1パターンであることが明らかになった。種としての絶滅の可能性は非常に低いが、ツチカメムシ生の分生子果は国内でも数地点で発生が知られるのみであり、産地の保全が重要である。

## 【文献等】

Yamamoto, K., M. Yasuda, M. Ohmae, H. Sato & T. Orihara, 2020. *Isaria macroscyticola*, a rare entomopathogenic species on Cydnidae (Hemiptera), is a synnematous form and synonym of *Purpureocillium lilacinum* (Ophiocordycipitaceae). *Mycoscience*, **61**(4): 160–164.

## 注目種

## オサムシタンポタケ

*Ophiocordyceps entomorrhiza* (Dicks.) G.H. Sung, J.M. Sung, Hywel-Jones & Spatafora

神奈川県	2006	絶滅危惧 I A 類
	1995	
環境省	2020	—

## 【判定理由】

本種の無性世代であるオサムシタケは各地に普通だが、有性世代の子嚢果であるオサムシタンポタケは非常に稀で、県内の産地も局所的であるため。

## 【生育環境・生態】

初夏から夏にかけて、林内のオサムシ成虫及び幼虫から発生する。宿主から延ばした柄の先端にタンポ型の子嚢果を形成する。昆虫寄生菌。

## 【現状】

本種の無性世代(アナモルフ)であるオサムシタケは普通に見られるが、有性世代を形成することは稀で、県内では1地点からのみ記録がある。県内産地の生育環境は比較的安定している。

## 【国内分布】

本州(アナモルフであるオサムシタケは北海道、本州、九州)

## 【県内分布】

相模原市

## 【存続を脅かす要因】

産地局限、市街化、森林伐採

## 【特記事項】

本種は『神RDB06』では絶滅危惧IAにランクされていたが、無性世代であるオサムシタケは稀ではなく、種としての絶滅の危険性は低いことから、ランクの変更を行った。しかし有性世代は希少で、発生地の環境保全は依然として重要である。

情報不足

カイガラムシツブタケ

*Ophiocordyceps coccidiicola* (Kobayasi) G.H. Sung, J.M. Sung, Hywel-Jones & Spatafora

神奈川県	2006	絶滅危惧 I A 類
	1995	
環境省	2020	絶滅危惧 II 類

【判定理由】

県内での発生は稀と考えられるが、情報が少なく、発生状況が不明であるため。

【生育環境・生態】

夏から秋にかけて、山地の沢沿いの灌木樹皮上に生育する大型のカイガラムシ類から発生する。昆虫寄生菌。

【現状】

丹沢山地において発生するとされるが、分布の詳細および発生状況は不明である。

【国内分布】

本州、四国

【県内分布】

山北町

【存続を脅かす要因】

産地局限、森林衰退

【特記事項】

本種は『神RDB06』では絶滅危惧 I A 類にランクされていたが、県内の発生状況が不明であることから、今回のRDBでは情報不足とした。各地での探索による成果が待たれる。

菌類

ネクトリア科

情報不足

和名なし<オフィオネクトリア・ヒダカエアナ>

*Ophionectria hidakaeana* I. Hino & Katum.

神奈川県	2006	準絶滅危惧/情報不足
	1995	
環境省	2020	—

【判定理由】

県内に原記載地があり発生地が限定されているため。

【生育環境・生態】

ハコネダケの稈上に微小な子嚢果を形成。腐生菌と考えられる。

【現状】

タイプ産地より採集され、記載されて以後、本種の確実な再報告例がない。

【国内分布】

本州(神奈川県)

【県内分布】

伊勢原市

【存続を脅かす要因】

森林伐採、産地局限

【特記事項】

本種は1955年に大山のハコネダケの稈上より発見され記載されて以後、再発見例がない。本種を *Tubeufia paludosa* (P. Crouan & H. Crouan) の異名とみなす解釈もあるが (Rossmann, 1977)、タイプロカリティから再発見をして詳細に再検討する必要がある。

クロサイワイタケ科

絶滅危惧 II 類

ハチスタケ

*Podosordaria jugoyasan* (Hara) Furuya & Udagawa

神奈川県	2006	準絶滅危惧
	1995	
環境省	2020	—

【判定理由】

良好な環境に保たれたニホンノウサギ生息地が減少しているため。

【生育環境・生態】

日数が経過し、乾燥したニホンノウサギ糞上に子実体を形成する。糞生菌(腐生菌)。

【現状】

ノウサギ類が生息する環境であれば発生の可能性はあるが、今のところ県内からの発生記録はごく散發的である。

【国内分布】

鹿児島県、茨城県他

【県内分布】

小田原市、横浜市

【存続を脅かす要因】

森林衰退、市街化

【特記事項】

本種はノウサギ類の糞上に特異的に発生するため、その保全にはノウサギ類の生息に適した環境が維持される必要がある。

絶滅危惧Ⅱ類			
<b>ブナノホソツクシタケ</b>		神奈川県	2006 1995
<i>Xylaria carpophila</i> (Pers.) Fr.		環境省	2020
			準絶滅危惧 —

  

<p>【判定理由】 発生環境がブナ帯に限られ、発生も稀な種であるため。</p> <p>【生育環境・生態】 夏から秋にかけて、冷温帯林のブナ殻斗から発生する。腐生菌。</p> <p>【現状】 県内の良好な環境のブナ林は減少傾向にあり、本種の発生にも影響を及ぼしている可能性がある。</p>	<p>【国内分布】 国内各地</p> <p>【県内分布】 山北町、清川村</p> <p>【存続を脅かす要因】 森林衰退、シカ影響、温暖化</p> <p>【特記事項】 本種の発生には、良好な生育環境が保たれたブナ林が必要であり、ブナ林の環境指標としても重要であろう。</p>
---	--

菌類

メタカブノディウム科

情報不足			
<b>カプノフィアロフォラ属の一種</b>		神奈川県	2006 1995
<i>Capnophialophora</i> cf. <i>pinophila</i> (Nees) Borowska		環境省	2020
			準絶滅危惧/情報不足 —

  

<p>【判定理由】 溪流沿いの高湿度の森林内に生育し、発生環境が脆弱と考えられるため。</p> <p>【生育環境・生態】 温帯性落葉広葉樹林の立ち枯れた木の幹や枝の下面にクッション状で大型、黒色のコロニーを発達する。腐生性と考えられる。</p> <p>【現状】 丹沢山地において発生が確認されているが、発生環境が限られており、稀である。</p>	<p>【国内分布】 本州(神奈川県)</p> <p>【県内分布】 山北町世附</p> <p>【存続を脅かす要因】 森林伐採、シカ影響、温暖化</p> <p>【特記事項】 本種の発生は溪流沿いの高湿度の自然環境が良好な森林に限定されると考えられる。再調査により良好な菌体を得ることができなかったため、今後、再発見に努め、分類学的ステータスを明確にする必要がある。</p>
--	--

ミクロチリウム科

情報不足			
<b>和名なし&lt;ヒダカエア・ツミデュラ&gt;</b>		神奈川県	2006 1995
<i>Hidakaea tumidula</i> I. Hino & Katum.		環境省	2020
			準絶滅危惧/情報不足 —

  

<p>【判定理由】 県内にタイプロカリティがあるが、再発見がなく再調査が必要であるため。</p> <p>【生育環境・生態】 植物寄生性。宿主は、タケ類(タケ亜科)。</p> <p>【現状】 不詳</p>	<p>【国内分布】 不詳</p> <p>【県内分布】 伊勢原市</p> <p>【存続を脅かす要因】 土地造成</p> <p>【特記事項】 1955年に大山より記載されて以後、再報告例が無い。県下にタイプロカリティがあり再発見の無い種については、発生環境が損なわれる前に、再調査をしておく必要がある。</p>
---	---

情報不足

和名なし<シログロニウム・サシコラ>

*Psiloglonium sasicola* (N. Amano) E.W.A. Boehm & C.L. Schoch  
≡ *Glonium sasicola* N. Amano

神奈川県	2006	準絶滅危惧/情報不足
	1995	
環境省	2020	—

【判定理由】

県内にタイプロカリティがあり、発生地が限定されているが再発見が無いため。

【生育環境・生態】

腐生性。ササ属の枝状に発生する。

【現状】

不詳

【国内分布】

不詳

【県内分布】

秦野市

【存続を脅かす要因】

土地造成

【特記事項】

1979年に丹沢山地より記載されて以後、再報告例が無い。県下にタイプロカリティがあり再発見の無い種については、発生環境が損なわれる前に、再調査をしておく必要がある。

ラブルベニア科

情報不足

和名なし<ヒドラエオミケス・ハリプリ>

*Hydraeomyces halipli* (Thaxt.) Thaxt.

神奈川県	2006	絶滅/情報不足
	1995	
環境省	2020	—

【判定理由】

県内にタイプロカリティがあり、発生地が限定されているが再発見が無いため。

【生育環境・生態】

昆虫寄生性。宿主はコガシラミズムシ。

【現状】

過去の記録地の現状は著しく変化している。

【国内分布】

不詳

【県内分布】

平塚市

【存続を脅かす要因】

土地造成

【特記事項】

1937年に平塚市より確認されて以後、県下での報告例はない。本種の属す子囊菌門のラブルベニア綱は、生きている昆虫等節足動物の体表に外部寄生する絶対寄生菌であり、宿主共に保全することが望ましいが、県内での調査は不十分であり、宿主が減少傾向にある種については、今後調査が必要である。

ラブルベニア科

情報不足

和名なし<ラブルベニア・ボレアリス>

*Laboulbenia borealis* Speng.

神奈川県	2006	絶滅/情報不足
	1995	
環境省	2020	—

【判定理由】

県内にタイプロカリティがあるが、再発見がなく再調査が必要であるため。

【生育環境・生態】

昆虫寄生性。宿主はミズスマシ。

【現状】

過去の記録地の現状は著しく変化している。

【国内分布】

不詳

【県内分布】

横浜市

【存続を脅かす要因】

土地造成

【特記事項】

1968年に横浜市で確認されて以後、県下での報告例はない。本種の属す子囊菌門のラブルベニア綱は、生きている昆虫等節足動物の体表に外部寄生する絶対寄生菌であり、宿主共に保全することが望ましいが、県内での調査は不十分であり、宿主が減少傾向にある種については、今後調査が必要である。

ラブルベニア科

情報不足		神奈川県		2006	絶滅／情報不足
和名なし<ラブルベニア・ブラキオニキ>		環境省		1995	—
				2020	
<i>Laboulbenia brachionychi</i> Thaxt.					
【判定理由】 報告例に限られており、調査が必要と考えられるため。	【国内分布】 不詳	【生育環境・生態】 昆虫寄生性。宿主はヨツボシゴミムシ。	【県内分布】 藤沢市	【存続を脅かす要因】 土地造成	【特記事項】 1937年に藤沢市で確認されて以後、県下での報告例はない。本種の属す子囊菌門のラブルベニア綱は、生きている昆虫等節足動物の体表に外部寄生する絶対寄生菌であり、宿主共に保全することが望ましいが、県内での調査は不十分であり、宿主が減少傾向にある種については、今後調査が必要である。
【現状】 過去の記録地の現状は著しく変化している。					

菌類

ラブルベニア科

情報不足		神奈川県		2006	準絶滅危惧／情報不足
和名なし<リックシア・テッセルラタ>		環境省		1995	—
				2020	
<i>Rickia tessellata</i> Thaxt.					
【判定理由】 県内にタイプロカリティがあるが、再発見がなく再調査が必要であるため。	【国内分布】 不詳	【生育環境・生態】 昆虫寄生性。宿主はヨツボシテントウムシダマシ。	【県内分布】 大磯町	【存続を脅かす要因】 土地造成	【特記事項】 1947年に大磯町で確認されて以後、県下での報告例は無い。本種の属す子囊菌門のラブルベニア綱は、生きている昆虫等節足動物の体表に外部寄生する絶対寄生菌であり、宿主共に保全することが望ましいが、県内での調査は不十分であり、宿主が減少傾向にある種については、今後調査が必要である。
【現状】 過去の記録地の現状は著しく変化している。					

ウドンコカビ科

準絶滅危惧		神奈川県		2006	準絶滅危惧
コウモリカズラうどんこ病菌		環境省		1995	—
				2020	
<i>Microsphaera menispermi</i> Howe var. <i>dahurica</i> U.Braun & Y.Nomura					
【判定理由】 報告例に限られており、調査が必要と考えられるため。	【国内分布】 他に報告例が無い。	【生育環境・生態】 植物寄生性。宿主はコウモリカズラ。	【県内分布】 藤野町	【存続を脅かす要因】 土地造成	【特記事項】 1981年に藤野町で確認されて以後、県下での報告例は無い。本種の属すウドンコビョウキン目には農業上有害となる植物病原菌も知られ、駆除の対象となることはあるが、野生植物に発生する種のうち、宿主が減少傾向にある種については、今後調査が必要である。
【現状】 宿主は普通種だが、本菌の発生は限定される傾向があり、追加調査が必要。					

絶滅危惧 I 類

カワラゴケ

*Coccocarpia erythroxyli* (Spreng.) Swinscow & Krog

神奈川県	2006	—
	1995	—
環境省	2020	—

【判定理由】

葉状地衣は概して大気汚染に弱く、生育地の環境悪化に伴う現象が危惧される。また、本種は特に希少であると考えられるため。

【生育環境・生態】

各種林内の広葉樹樹幹に着生する葉状地衣。ラン藻類と共生する。

【現状】

丹沢山地において生育が確認されているが、稀である。木下・原田(2007)により丹沢山地の複数個所から報告されているが、2019年の神RDB調査時にも丹沢山地で生育が確認された。

【国内分布】

国内各地

【県内分布】

伊勢原市、山北町、清川村

【存続を脅かす要因】

産地局限、森林衰退、森林伐採、大気汚染

【特記事項】

本種は自然環境が良好に保たれた森林内の樹幹に生育し、県内では丹沢山地でのみ発生が確認されている。生育地の包括的な環境保全が望まれる。

【文献等】

木下靖浩・原田 浩, 2007. 地衣類 Lichens. 丹沢大山総合調査団編, 丹沢大山総合調査学術報告書, 丹沢大山動植物目録, pp. 62-67. 平岡環境科学研究所, 相模原.

絶滅危惧 I 類

チヂレバカワラゴケ

*Coccocarpia pellita* (Ach.) Sant.

神奈川県	2006	絶滅危惧 I A 類
	1995	
環境省	2020	—

【判定理由】

葉状地衣は概して大気汚染に弱く、生育地の環境悪化に伴う減少が危惧される。また、本種は特に希少であると考えられるため。

【生育環境・生態】

各種林内の広葉樹樹幹に着生する葉状地衣。ラン藻類と共生する。

【現状】

丹沢山地の比較的広域で生育が確認されているが、全国的に稀である。2019年の神RDB調査時にも丹沢山地で生育が確認された。

【国内分布】

本州以南の各地

【県内分布】

山北町、清川村

【存続を脅かす要因】

産地局限、森林衰退、森林伐採、シカ影響、大気汚染

【特記事項】

森林環境が良好に保たれた地域に見られる葉状地衣の一種で、全国的に発見例が少ない(山本, 2020)。特に、関東地方における産地は局所的で、本県における分布は生物地理学的にも重要である。

【文献等】

山本好和, 2020. 日本の地衣類—日本産地衣類の全国産地総目録. 284pp. 三恵社, 愛知.

絶滅危惧 I 類

ニセトゲヨロイゴケ

*Dendriscosticta praetextata* (Räsänen) Moncada & Lücking

神奈川県	2006	—
	1995	—
環境省	2020	—

【判定理由】

葉状地衣は概して大気汚染に弱く、生育地の環境悪化に伴う減少が危惧される。本種はとりわけ産地が僅少であるため。

【生育環境・生態】

冷温帯林の広葉樹樹幹に着生する葉状地衣。共生菌。

【現状】

丹沢山地の比較的広域で生育が確認されているが、全国的に非常に稀である。

【国内分布】

本州、四国

【県内分布】

山北町、清川村

【存続を脅かす要因】

産地局限、森林衰退、森林伐採、シカ影響、大気汚染

【特記事項】

本種は全国的に稀産種と考えられ、丹沢山地の他には山梨県、栃木県などの数か所から知られるのみである(山本, 2020)。

【文献等】

山本好和, 2020. 日本の地衣類—日本産地衣類の全国産地総目録. 284pp. 三恵社, 愛知.

絶滅危惧 I 類								
<p style="font-size: 1.2em; font-weight: bold; margin: 0;">オオアワビゴケ</p> <p style="margin: 0;"><i>Nephromopsis nephromoides</i> (Nyl.) Randlane &amp; Saag</p>	<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td rowspan="2" style="text-align: center;">神奈川県</td> <td style="text-align: center;">2006</td> <td rowspan="2" style="text-align: center;">絶滅危惧 I A 類</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">1995</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">環境省</td> <td style="text-align: center;">2020</td> <td style="text-align: center;">—</td> </tr> </table>	神奈川県	2006	絶滅危惧 I A 類	1995	環境省	2020	—
神奈川県	2006		絶滅危惧 I A 類					
	1995							
環境省	2020	—						
<p><b>【判定理由】</b> 葉状地衣は概して大気汚染に弱く、生育地の環境悪化に伴う現象が危惧される上、本種は県内産地に限られるため。</p> <p><b>【生育環境・生態】</b> 冷温帯林の広葉樹樹幹に着生する葉状地衣。緑藻類と共生する。</p> <p><b>【現状】</b> 丹沢山地において発生が確認されているが、発生量は多くはない。</p>	<p><b>【国内分布】</b> 本州、四国、九州</p> <p><b>【県内分布】</b> 丹沢山地(西丹沢)</p> <p><b>【存続を脅かす要因】</b> 産地局限、森林衰退、森林伐採、シカ影響、大気汚染</p> <p><b>【特記事項】</b> 県内では木下・原田(2007)による記録がある。</p> <p><b>【文献等】</b> 木下靖浩・原田 浩, 2007. 地衣類 Lichens. 丹沢大山総合調査団編, 丹沢大山総合調査学術報告書, 丹沢大山動物植物目録, pp. 62-67. 平岡環境科学研究所, 相模原.</p>							

絶滅危惧 I 類								
<p style="font-size: 1.2em; font-weight: bold; margin: 0;">ツノマタゴケモドキ</p> <p style="margin: 0;"><i>Everniastrum cirrhatum</i> (Fr.) Sipman</p>	<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td rowspan="2" style="text-align: center;">神奈川県</td> <td style="text-align: center;">2006</td> <td rowspan="2" style="text-align: center;">絶滅危惧 I A 類</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">1995</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">環境省</td> <td style="text-align: center;">2020</td> <td style="text-align: center;">—</td> </tr> </table>	神奈川県	2006	絶滅危惧 I A 類	1995	環境省	2020	—
神奈川県	2006		絶滅危惧 I A 類					
	1995							
環境省	2020	—						
<p><b>【判定理由】</b> 葉状地衣は概して大気汚染に弱く、生育地の環境悪化に伴う減少が危惧される上、本種は県内産地が非常に限られるため。</p> <p><b>【生育環境・生態】</b> 温帯～暖温帯の樹皮上や岩上に着生する葉状地衣。緑藻類と共生する。</p> <p><b>【現状】</b> 丹沢山地において発生が確認されているが、発生量は多くはない。</p>	<p><b>【国内分布】</b> 本州、四国、九州、薩南諸島</p> <p><b>【県内分布】</b> 丹沢山地(西丹沢、大山)</p> <p><b>【存続を脅かす要因】</b> 産地局限、森林衰退、森林伐採、シカ影響</p> <p><b>【特記事項】</b> 県内では木下・原田(2007)による記録があるが東日本からの記録は極めて稀である。</p>							

絶滅危惧 I 類								
<p style="font-size: 1.2em; font-weight: bold; margin: 0;">ジツムジサラゴケ</p> <p style="margin: 0;"><i>Gyalecta japonica</i> Asahina</p>	<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td rowspan="2" style="text-align: center;">神奈川県</td> <td style="text-align: center;">2006</td> <td rowspan="2" style="text-align: center;">絶滅危惧 I A 類</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">1995</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">環境省</td> <td style="text-align: center;">2020</td> <td style="text-align: center;">—</td> </tr> </table>	神奈川県	2006	絶滅危惧 I A 類	1995	環境省	2020	—
神奈川県	2006		絶滅危惧 I A 類					
	1995							
環境省	2020	—						
<p><b>【判定理由】</b> 生育地が局所的であるため。</p> <p><b>【生育環境・生態】</b> 暖温帯の照葉樹林内の凝灰岩の露頭に着生する痂状地衣。</p> <p><b>【現状】</b> 丹沢山地において発生が確認されているが、発生量は多くはない。</p>	<p><b>【国内分布】</b> 本州暖温帯(神奈川県・千葉県)</p> <p><b>【県内分布】</b> 逗子市、鎌倉市</p> <p><b>【存続を脅かす要因】</b> 山地極限、森林伐採、道路建設、市街化</p> <p><b>【特記事項】</b> 逗子市産の標本に基づいて1933年に記載されて以後、永らく再発見が無かったが、2005年にタイプロカリティと千葉県で再発見され、限られた産地では良好に生育していることが確認されている。</p> <p><b>【文献等】</b> 原田 浩・出川洋介・川名 興, 2005. ジツムジサラゴケ(サラゴケ科地衣類)の新産地と生育地について. Lichenologist. 4: 41.</p>							

菌類

絶滅危惧 I 類

イコマゴンゲンゴケモドキ

*Hypotrachyna incognita* (Kurok.) Hale

神奈川県	2006	—
	1995	—
環境省	2020	—

【判定理由】

葉状地衣は概して大気汚染に弱く、生育地の環境悪化に伴う現象が危惧される上、本種は県内産地が限られるため。

【生育環境・生態】

冷温帯林の広葉樹樹幹に着生する葉状地衣。

【現状】

丹沢山地において発生が確認されているが、発生数は少ないと考えられる。

【国内分布】

国内各地

【県内分布】

丹沢山地

【存続を脅かす要因】

産地局限、森林衰退、森林伐採、大気汚染

【特記事項】

県内では木下・原田(2007)より大山における記録があるが、その後の発生記録は無く、稀産種と考えられる。

【文献等】

木下靖浩・原田 浩, 2007. 地衣類 Lichens. 丹沢大山総合調査団編, 丹沢大山総合調査学術報告書, 丹沢大山動植物目録, pp. 62-67. 平岡環境科学研究所, 相模原.

絶滅危惧 I 類

ヘリトリツメゴケ

*Peltigera collina* (Ach.) Schrad.

神奈川県	2006	絶滅危惧 I A 類
	1995	—
環境省	2020	—

【判定理由】

葉状地衣は概して大気汚染に弱く、生育地の環境悪化に伴う減少が危惧される上、本種は県内産地が限られるため。

【生育環境・生態】

温帯～冷温帯林の樹幹や地上に着生する葉状地衣。シアノバクテリアと共生する。

【現状】

丹沢山地において発生が確認されているが、発生量は多くはない。

【国内分布】

本州、北海道

【県内分布】

丹沢山地(東丹沢)

【存続を脅かす要因】

産地局限、森林衰退、森林伐採、シカ影響

【特記事項】

県内では木下・原田(2007)による記録があるが、このほか、本属のチヂレツメゴケ *P. praetextata* など他種についても絶滅が危惧される

絶滅危惧 I 類

ウスバトコブシゴケ

*Platismatia interrupta* W.L. Culb. & C.F. Culb.

神奈川県	2006	絶滅危惧 I A 類
	1995	—
環境省	2020	—

【判定理由】

葉状地衣は概して大気汚染に弱く、生育地の環境悪化に伴う減少が危惧される上、本種は県内産地が非常に限られるため。

【生育環境・生態】

亜寒帯の樹皮上に着生する葉状地衣。緑藻類と共生する。

【現状】

丹沢山地において発生が確認されているが、発生量は多くはない。

【国内分布】

本州、北海道

【県内分布】

丹沢山地(西丹沢)

【存続を脅かす要因】

産地局限、森林衰退、森林伐採、大気汚染

【特記事項】

本種は、亜高山帯の針葉樹林には普通な種だが、針葉樹林帯が存在しない神奈川県下での発生は特異とされる(木下・原田, 2007)。

【文献等】

木下靖浩・原田 浩, 2007. 地衣類 Lichens. 丹沢大山総合調査団編, 丹沢大山総合調査学術報告書, 丹沢大山動植物目録, pp. 62-67. 平岡環境科学研究所, 相模原.

絶滅危惧 I 類		神奈川県		2006	絶滅危惧 I A 類
ニセキンブチゴケ		環境省		1995	—
				2020	
<p><i>Pseudocyphellaria crocata</i> (L.) Vain.</p>		<p>【判定理由】 葉状地衣は概して大気汚染に弱く、生育地の環境悪化に伴う現象が危惧される上、本種は県内産地が非常に限られるため。</p> <p>【生育環境・生態】 冷温帯～暖温帯の樹皮上や岩上に着生する葉状地衣。シアノバクテリア類と共生する。</p> <p>【現状】 丹沢山地において発生が確認されているが、発生量は多くはない。</p>		<p>【国内分布】 国内各地</p> <p>【県内分布】 丹沢山地(東丹沢)</p> <p>【存続を脅かす要因】 産地局限、森林衰退、森林伐採、大気汚染</p> <p>【特記事項】 本種は自然環境が良好に保たれた森林内の樹幹に生育し、県内では丹沢山地でのみ発生が確認されている。生育地の包括的な環境保全が望まれる。</p> <p>【文献等】 木下靖浩・原田 浩, 2007. 地衣類 Lichens. 丹沢大山総合調査団編, 丹沢大山総合調査学術報告書, 丹沢大山動植物目録, pp. 62-67. 平岡環境科学研究所, 相模原.</p>	

絶滅危惧 I 類		神奈川県		2006	—
コウヤクゴケ		環境省		1995	—
				2020	
<p><i>Sticta fuliginosa</i> (Dicks.) Ach.</p>		<p>【判定理由】 葉状地衣は概して大気汚染に弱く、生育地の環境悪化に伴う減少が危惧される上、本種は県内産地が非常に限られるため。</p> <p>【生育環境・生態】 温帯～冷温帯林の広葉樹樹幹に着生する葉状地衣。ラン藻類と共生する。</p> <p>【現状】 丹沢山地において発生が確認されているが、非常に稀。</p>		<p>【国内分布】 国内各地</p> <p>【県内分布】 丹沢山地</p> <p>【存続を脅かす要因】 産地局限、森林衰退、森林伐採、シカ影響</p> <p>【特記事項】 県内では木下・原田(2007)による記録があるが、その他の報告例は無く、稀産種と考えられる。</p> <p>【文献等】 木下靖浩・原田 浩, 2007. 地衣類 Lichens. 丹沢大山総合調査団編, 丹沢大山総合調査学術報告書, 丹沢大山動植物目録, pp. 62-67. 平岡環境科学研究所, 相模原.</p>	

絶滅危惧 I 類		神奈川県		2006	絶滅危惧 I A 類
サルオガセ属		環境省		1995	—
				2020	
<p><i>Usnea</i> spp.</p>		<p>【判定理由】 大気汚染に弱く、県内では山城の限られた地域にしか分布しないため。</p> <p>【生育環境・生態】 湿潤な林内の樹木に着生する樹状地衣で、成長すると樹上から枝垂れる。緑藻との共生菌。</p> <p>【現状】 丹沢山地および箱根町において発生が確認されている。複数種が産するが、それぞれの種の現状は十分に明らかになっていない。</p>		<p>【国内分布】 国内各地</p> <p>【県内分布】 丹沢山地、箱根町</p> <p>【存続を脅かす要因】 森林衰退、森林伐採、温暖化、大気汚染</p> <p>【特記事項】 県内にはアカサルオガセ、トゲサルオガセ、ホンドサルオガセ、ハコネサルオガセ、ヨコワサルオガセなど複数種が分布するが(山本, 2020)、いずれも発生は多くない。</p> <p>【文献等】 山本好和, 2020. 日本の地衣類—日本産地衣類の全国産地総目録. 284pp. 三恵社, 愛知.</p>	

絶滅危惧Ⅱ類

カブトゴケ属

*Lobaria* spp.

神奈川県	2006	絶滅危惧ⅠA類
	1995	
環境省	2020	—

【判定理由】

本属の地衣類は主に比較的限られた山域に分布し、大気汚染にも弱いと考えられるため。

【生育環境・生態】

山地の林内および林縁に生育する葉状地衣。緑藻またはラン藻と共生する。

【現状】

丹沢山地および箱根町において発生が確認されている。ナメカブトゴケ*L. orientalis* は比較的多く産する。今回のRDB調査では、その他にカブトゴケモドキ*L. kurokawae*、チヂレカブトゴケモドキ*L. retigera* var. *retigera*、ヘラガタカブトゴケ*L. spathulata*、エビラゴケ*L. discolor* var. *discolor* およびカブトゴケ属未同定種を記録。チヂレカブトゴケ*L. isidiophora*、ウラグロエビラゴケ*L. fuscotomentosa* は今回未確認。

【国内分布】

国内各地

【県内分布】

相模原市、伊勢原市、山北町、箱根町、清川村

【存続を脅かす要因】

森林衰退、森林伐採、大気汚染

【特記事項】

本属の地衣類の中には、比較的多く発生が確認されている種も含まれるが、発生環境が山地帯に限定され、概して稀な種が多い。今後、よりの確な保全を講ずるために、種レベルでの分布および生育状況の調査が必要である。

カラタチゴケ科

絶滅危惧Ⅱ類

ハマカラタチゴケ

*Ramalina siliquosa* (Huds.) A.L. Sm.

神奈川県	2006	—
	1995	
環境省	2020	—

【判定理由】

発生環境がほぼ同一であるイソカラタチゴケに比べ発生が稀であるため。

【生育環境・生態】

海岸の磯やコンクリート擁壁の波打ち際に着生する地衣類。

【現状】

発生環境は比較的良好であるが、個体数が少ない。

【国内分布】

国内各地

【県内分布】

真鶴町、三浦市

【存続を脅かす要因】

水質汚濁、大気汚染、海岸開発

【特記事項】

生育環境を共有するイソカラタチゴケと類似するが、地衣体がほとんど分枝せず、扁平である点で肉眼的に識別可能である。

ムカデゴケ科

絶滅危惧Ⅱ類

トゲヒメゲジゲジゴケ

*Anaptychia isidiza* Kurok.

神奈川県	2006	絶滅危惧Ⅱ類
	1995	
環境省	2020	—

【判定理由】

本県では比較的限られた山域に分布しており、大気汚染にも弱いと考えられるため。

【生育環境・生態】

冷温帯から暖温帯の樹皮上に着生する葉状地衣。緑藻類と共生する。

【現状】

丹沢山地において発生が確認されているが、発生量は多くはない。

【国内分布】

国内各地

【県内分布】

丹沢山地(東丹沢)

【存続を脅かす要因】

産地局限、森林衰退、森林伐採、大気汚染

【特記事項】

県内では木下・原田(2007)による記録がある。

【文献等】

木下靖浩・原田 浩, 2007. 地衣類 Lichens. 丹沢大山総合調査団編, 丹沢大山総合調査学術報告書, 丹沢大山動植物目録, pp. 62-67. 平岡環境科学研究所, 相模原.

絶滅危惧Ⅱ類		神奈川県	2006	絶滅危惧Ⅱ類
アンチゴケ属	<i>Anzia opuntiella</i> Mull. Arg.	神奈川県	1995	—
		環境省	2020	

【判定理由】  
本県では比較的限られた山域に分布しており、大気汚染にも弱いと考えられるため。

【生育環境・生態】  
冷温帯から暖温帯の樹皮上に着生する葉状地衣。緑藻類と共生する。

【現状】  
丹沢山地において発生が確認されているが、発生量は多くはない。

【国内分布】  
国内各地

【県内分布】  
丹沢山地

【存続を脅かす要因】  
産地局限、森林衰退、森林伐採、大気汚染

【特記事項】  
本属の全般に絶滅が危惧されるが、県下では木下・原田(2007)により、セスジアンチゴケ *A. hypoleuroides*、アンチゴケ *A. opuntiella* が記録されている。

【文献等】  
木下靖浩・原田 浩, 2007. 地衣類 Lichens. 丹沢大山総合調査団編, 丹沢大山総合調査学術報告書, 丹沢大山動植物目録, pp. 62-67. 平岡環境科学研究所, 相模原。

菌類

絶滅危惧Ⅱ類		神奈川県	2006	絶滅危惧Ⅱ類
フォーリザクロゴケ	<i>Haematomma fauriei</i> Zahlbr.	神奈川県	1995	—
		環境省	2020	

【判定理由】  
本県では比較的限られた山域に分布しており、大気汚染にも弱いと考えられるため。

【生育環境・生態】  
冷温帯の樹皮上に着生する痂状地衣。緑藻類と共生する。

【現状】  
丹沢山地において発生が確認されているが、発生量は多くはない。

【国内分布】  
本州

【県内分布】  
丹沢山地

【存続を脅かす要因】  
産地局限、森林衰退、森林伐採、大気汚染

【特記事項】  
県内では木下・原田(2007)による記録がある。

【文献等】  
木下靖浩・原田 浩, 2007. 地衣類 Lichens. 丹沢大山総合調査団編, 丹沢大山総合調査学術報告書, 丹沢大山動植物目録, pp. 62-67. 平岡環境科学研究所, 相模原。

絶滅危惧Ⅱ類		神奈川県	2006	絶滅危惧Ⅱ類
テツイロハナビラゴケ	<i>Pannaria lurida</i> subsp. <i>lurida</i> (Mont.) Nyl.	神奈川県	1995	—
		環境省	2020	

【判定理由】  
本県では比較的限られた山域に分布しており、大気汚染にも弱いと考えられるため。

【生育環境・生態】  
亜熱帯から冷温帯の樹皮上や岩上に着生する葉状地衣。シアノバクテリア類と共生する。

【現状】  
丹沢山地において発生が確認されているが、発生量は多くはない。

【国内分布】  
国内各地

【県内分布】  
丹沢山地

【存続を脅かす要因】  
産地局限、森林衰退、森林伐採、大気汚染

【特記事項】  
県内では木下・原田(2007)による記録がある。

【文献等】  
木下靖浩・原田 浩, 2007. 地衣類 Lichens. 丹沢大山総合調査団編, 丹沢大山総合調査学術報告書, 丹沢大山動植物目録, pp. 62-67. 平岡環境科学研究所, 相模原。

## 絶滅危惧Ⅱ類

## ハクフンゴケ

*Physconia grumosa* Kashiw. & Poelt

神奈川県	2006	絶滅危惧Ⅱ類
	1995	
環境省	2020	—

## 【判定理由】

本県では比較的限られた山域に分布しており、大気汚染にも弱いと考えられるため。

## 【生育環境・生態】

冷温帯の樹皮上に着生する葉状地衣。緑藻類と共生する。

## 【現状】

丹沢山地において発生が確認されているが、発生量は多くはない。

## 【国内分布】

北海道、本州、四国

## 【県内分布】

丹沢山地

## 【存続を脅かす要因】

産地局限、森林衰退、森林伐採、大気汚染

## 【特記事項】

県内では木下・原田(2007)による記録がある。

## 【文献等】

木下靖浩・原田 浩, 2007. 地衣類 Lichens. 丹沢大山総合調査団編, 丹沢大山総合調査学術報告書, 丹沢大山動植物目録, pp. 62-67. 平岡環境科学研究所, 相模原.

## イワノリ科

## 準絶滅危惧

## ツブカワキノリ

*Leptogium saturninum* (Dicks.) Nyl.

神奈川県	2006	—
	1995	
環境省	2020	—

## 【判定理由】

丹沢山地などの冷温帯に発生環境が限られ、将来的な発生環境の悪化が懸念されるため。

## 【生育環境・生態】

冷温帯林の樹幹に着生する葉状地衣。ラン藻との共生菌。

## 【現状】

これまで県内からの記録は無かったが、今回実施されたRDB調査において、西丹沢で初めて発生が確認された。

## 【国内分布】

国内各地

## 【県内分布】

山北町

## 【存続を脅かす要因】

産地局限、森林衰退、森林伐採、大気汚染

## 【特記事項】

2019年、本RDBのための調査において県内での発生が初めて確認された。アオキノリ属の葉状地衣は山地性の種が主であり、県内での発生は概して多くない。

## カラタチゴケ科

## 準絶滅危惧

## イソカラタチゴケ

*Ramalina litoralis* Asah.

神奈川県	2006	—
	1995	
環境省	2020	—

## 【判定理由】

発生環境がほぼ同一であるハマカラタチゴケに比べややふつうに見られ、海岸の環境指標として有用であるため。

## 【生育環境・生態】

海岸の磯やコンクリート擁壁の波打ち際に着生する地衣類。緑藻との共生菌。

## 【現状】

発生に適した環境は多くは無いものの、比較的良好に保たれている。

## 【国内分布】

国内各地

## 【県内分布】

真鶴町

## 【存続を脅かす要因】

水質汚濁、大気汚染、海岸開発

## 【特記事項】

生育環境を共有するハマカラタチゴケよりも個体数は多く、より広範な環境に適応しているものと考えられる。

情報不足			
ニセゴンゲンゴケ	<i>Hypotrachyna exsecta</i> (Taylor) Hale	神奈川県	2006 —
			1995 —
		環境省	2020 —

【判定理由】  
全国的に稀な種であり、県内の近年の発生記録も無いため。

【生育環境・生態】  
冷温帯林の樹幹に着生する葉状地衣。緑藻との共生菌。

【現状】  
Zahlbruckner (1927) により箱根からの記録があるが、近年の発生記録はなく、分布の現状は不明である。

【国内分布】  
国内各地

【県内分布】  
箱根町

【存続を脅かす要因】  
森林衰退、森林伐採、大気汚染、温暖化

【特記事項】  
古くは箱根町における記録があるものの、本種が現在も県内分布しているかどうかは不明である。今後も箱根周辺の分布調査を継続する必要がある。

【文献等】  
Zahlbruckner, A. 1927. Additamenta ad Lichenographiam Japoniae. *Botanical Magazine, Tokyo*, **41**:313–364.

菌類

グロムス科

準絶滅危惧			
和名なし<スクレロキスティス・コレミオイデス>	<i>Sclerocystis coremioides</i> Berk.	神奈川県	2006 準絶滅危惧
			1995 —
		環境省	2020 —

【判定理由】  
生育環境が限定されており、分布北限域に近いと考えられるため。

【生育環境・生態】  
おそらく植物共生性(アーバスキュラー菌根性)。

【現状】  
発生地が何例か知られるが発生例は多くない。

【国内分布】  
東京都、御蔵島

【県内分布】  
横浜市、小田原市、真鶴町

【存続を脅かす要因】  
土地造成

【特記事項】  
本種は亜熱帯性の種で、本県は分布の北限域に位置する。

グロムス科

注目種			
和名なし<グロムス・ベルシフォルメ近縁種>	<i>Glomus</i> cf. <i>versiforme</i> (P. Karst.) S.M. Berch	神奈川県	2006 —
			1995 —
		環境省	2020 —

【判定理由】  
湿原より発見されたが、本種の発生環境が特定できておらず、今後、さらに調査が必要と考えられるため。

【生育環境・生態】  
おそらく植物共生性(アーバスキュラー菌根性)。

【現状】  
生態的知見が少なく、今後の追加調査が必要。

【国内分布】  
他に報告例が無い。

【県内分布】  
箱根町

【存続を脅かす要因】  
湿地開発

【特記事項】  
2019年の仙石原湿原のRDB菌類調査により日本新産種として発見された。

ケカビ科

情報不足

和名なし<ジゴリンクス・ジャポニクス>

*Zygorhynchus japonicus* Komin.

神奈川県	2006	野生絶滅/情報不足
	1995	
環境省	2020	—

【判定理由】

県内にタイプロカリティがあるが、再発見がなく再調査が必要であるため。

【生育環境・生態】

腐生性。土壤中に生育する。

【現状】

過去の記録地の現状は著しく変化。

【国内分布】

国内報告例はない。ロシアより報告例がある。

【県内分布】

鎌倉市

【存続を脅かす要因】

土地造成

【特記事項】

日本産の分離菌株は絶えており、野生絶滅に該当。

菌類

ケカビ科

準絶滅危惧

和名なし<スポロディニエラ・ウンベラータ>

*Sporodiniella umbellata* Boedijn ex H.C. Evans & Samson

神奈川県	2006	準絶滅危惧
	1995	
環境省	2020	—

【判定理由】

生育環境が限定されており、分布北限域に近いと考えられるため。

【生育環境・生態】

腐生性もしくは弱昆虫寄生性。

【現状】

複数回発見されている発生地があるが、確認例は多くない。

【国内分布】

本州、四国、九州

【県内分布】

横浜市、葉山町、愛川町

【存続を脅かす要因】

土地造成

【特記事項】

南方系の種と考えられ、県下における発生は夏から初秋に限られる。確認例が少なく、生態について不明点が多い。自然界で特定の発生環境が必要と考えられる。

ヘリコケファルム科

準絶滅危惧

トムライカビ

*Rhopalomyces strangulatus* Thaxt.

神奈川県	2006	準絶滅危惧
	1995	
環境省	2020	—

【判定理由】

生育環境が限定されており、確認例が少ないため。

【生育環境・生態】

分解途上の脊椎動物遺体に発生する。

【現状】

発生地が何例か知られるが確認例は多くない。

【国内分布】

京都府、愛知県、東京都

【県内分布】

平塚市、小田原市

【存続を脅かす要因】

土地造成

【特記事項】

脊椎動物遺体の分解途上という特殊環境下に認められるが、確認例が少なく、生態について不明点が多い。同属のほぼ全種が線虫等の微小動物捕食菌であるが、本種では動物捕食は確認されていない。本種の生育には自然界で安定して継続的に脊椎動物の遺体が供給されるような豊かな自然環境が必要と考えられる。

レゲリオミケス科

注目種			
和名なし<シムリオミケス・ミクロスポルス>	神奈川県	2006	—
		1995	
<i>Simulium microspor</i> Lichtw.	環境省	2020	—

【判定理由】  
近年、県下より発見されたが、本種の発生環境が特定できておらず、今後、さらに調査が必要と考えられるため。

【生育環境・生態】  
昆虫腸内生。アシマダラブユの幼虫の後腸に生育する。

【現状】  
生態的知見が十分ではなく、今後の調査が必要。

【国内分布】  
北海道

【県内分布】  
小田原市

【存続を脅かす要因】  
河川開発、池沼開発

【特記事項】  
陶山ら(2017)により県内より初めて確認された。宿主は稀なものではなく、今後、感染頻度についての調査を進め、生息状況を明らかにする必要がある。

レゲリオミケス科

注目種			
和名なし<ペンネラ・アングスティスポラ>	神奈川県	2006	—
		1995	
<i>Pennella angustispora</i> Lichtwardt	環境省	2020	—

【判定理由】  
近年、県下より記録されたが、本種の発生環境が特定できておらず、今後、さらに調査が必要と考えられるため。

【生育環境・生態】  
昆虫腸内生。アシマダラブユの幼虫の後腸に生育する。

【現状】  
生態的知見が少なく、今後の追加調査が必要。

【国内分布】  
茨城県

【県内分布】  
小田原市

【存続を脅かす要因】  
河川開発、池沼開発

【特記事項】  
佐藤・折原(2013)により県内で初めて確認された。宿主は稀なものではなく、今後、感染頻度についての調査を進め、生息状況を明らかにする必要がある。

オルフェラ科

注目種			
和名なし<オルフェラ・ハイシイ>	神奈川県	2006	絶滅危惧Ⅱ類
		1995	
<i>Orphella haysii</i> M.C. Williams & Lichtw.	環境省	2020	—

【判定理由】  
近年、県下より記録されたが、本種の発生環境が特定できておらず、今後、さらに調査が必要と考えられるため。

【生育環境・生態】  
昆虫腸内生。カワゲラ目昆虫の幼虫の後腸に生育する。

【現状】  
生態的知見が少なく、今後の追加調査が必要。

【国内分布】  
本州

【県内分布】  
小田原市、秦野市、山北町、中井町

【存続を脅かす要因】  
河川開発、池沼開発

【特記事項】  
宿主は稀なものではなく、今後、感染頻度についての調査を進め、生息状況を明らかにする必要がある。

〈写真あり: 口絵9〉

菌類

情報不足

ミカドホネホコリ

*Diderma imperialis* Emoto

神奈川県	2006	絶滅／情報不足
	1995	
環境省	2020	—

【判定理由】

県内にタイプロカリティがあり、発生地が限定されているが再調査が実施されたにもかかわらず再発見が無いため。

【生育環境・生態】

スギ樹皮に生育した蕨類上に子実体を形成する。

【現状】

社寺林として比較的、保護されている。

【国内分布】

本州

【県内分布】

逗子市

【存続を脅かす要因】

森林伐採

【特記事項】

昭和天皇が1928年7月に逗子市神武寺境内で採集された標本に基づいて記載された。タイプロカリティにおいて近年詳細な調査が実施されているが再発見はなされていない。

【文献等】

矢野倫子ほか, 2013. 逗子市神武寺の変形菌相継続調査—昭和天皇の採集地を中心に—, 神奈川県立博物館研究報告(自然科学).(42): 13–22.

準絶滅危惧

ネツタイホネホコリ

*Diderma subdictyospermum* (Rostaf.) G. Lister

神奈川県	2006	準絶滅危惧
	1995	
環境省	2020	—

【判定理由】

生育環境が限定されており、分布北限域に近いと考えられるため。

【生育環境・生態】

照葉樹林の落葉上に子実体を形成する。

【現状】

発生環境は、社寺林として比較的、保護されているが発生例は多くない。

【国内分布】

国外では東南アジア、南米、アフリカから知られる。

【県内分布】

伊勢原市、逗子市

【存続を脅かす要因】

森林伐採

【特記事項】

南方系の種と考えられ、県下における生育は北限域に近い。2006年に伊勢原市で発見されて以後、2010年に逗子市でも発見された。

準絶滅危惧

シシガシラホコリ

*Physarina alboscabra* Nann.-Bremek. & Y.Yamam.

神奈川県	2006	準絶滅危惧
	1995	
環境省	2020	—

【判定理由】

生育環境が限定されており、分布北限域に近いと考えられるため。

【生育環境・生態】

照葉樹林の落葉上に子実体を形成する。

【現状】

発生環境は、社寺林として比較的、保護されているが発生例は多くない。

【国内分布】

本州、四国

【県内分布】

伊勢原市、逗子市

【存続を脅かす要因】

森林伐採

【特記事項】

南方系の種と考えられ、県下における生育は北限域に近い。2007年に伊勢原市で発見されて以後、逗子市でも発見された。

【文献等】

山本幸憲ほか, 2011. 逗子市神武寺の変形菌相, 神奈川県立博物館研究報告(自然科学).(40): 35–60.

準絶滅危惧		2006		準絶滅危惧
メダマホコリ <i>Colloderma oculatum</i> (C. Lippert) G. Lister	神奈川県	2006		
		1995		
	環境省	2020		—

【判定理由】  
生育環境が限定されているため。

【生育環境・生態】  
針葉樹の倒木表面に子実体を形成する。

【現状】  
モミなどの針葉樹の老齢林が減少している。

【国内分布】  
本州、四国、九州

【県内分布】  
清川村

【存続を脅かす要因】  
森林伐採

【特記事項】  
県外の温帯性針葉樹林には普通に多産する場所もあるが、県内では本種が生育するような、コケに薄く覆われ湿度を保つ針葉樹の腐木が安定供給される環境が減少している。近年本種と、本属の近縁種オオメダマホコリが伊豆半島の天城山系より報告されている。

【文献等】  
矢野倫子ほか, 2017. 伊豆半島の変形菌相, 神奈川県立博物館研究報告(自然科学).(46): 25-38.

注目種		2006		—
マガイモジホコリ近縁種 <i>Physarum</i> cf. <i>decipiens</i> M.A. Curtis	神奈川県	2006		
		1995		
	環境省	2020		—

【判定理由】  
湿原より発見されたが、本種の発生環境が特定できておらず、今後、さらに調査が必要と考えられるため。

【生育環境・生態】  
森林の腐木、および湿原の落葉上に子実体を形成。

【現状】  
生態的知見が少なく、今後の追加調査が必要。

【国内分布】  
本州、四国、九州

【県内分布】  
箱根町(仙石原)

【存続を脅かす要因】  
湿原開発

【特記事項】  
2019年の仙石原湿原のRDB菌類調査において、湿原内のミズゴケ属生育地で半ば水没したイネ科草本リター上に発見された。本種は腐木などに稀な種として知られてきたが、今後、詳細な調査が求められる。